

宮崎大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ

昭和59年度

—宮大農学部平畑遺跡XXV区—

宮 崎 大 学
宮 崎 県 教 育 委 員 会

宮崎大学埋蔵文化財調査報告 I

昭和 59 年度

— 宮大農学部平畠遺跡 XXV 区 —

宮 崎 大 学
宮 崎 県 教 育 委 員 会

序

宮崎大学では、国・県その他関係諸機関の御協力を頂きながら宮崎学園都市への移転統合を計画して参りましたが、昭和58年3月に着工した農学部は昨年秋に移転を終り、現在建設中の工学部は来年、また昭和63年には教育学部が移転して新しいキャンパスへの統合を完了する予定で作業を進めているところです。

学園都市区域内の埋蔵文化財については、地域振興整備公団の委託によって調査を実施された宮崎県教育委員会から詳細な報告書が刊行されており、大学キャンパスについては、その第2集に記載されています。

その際現況を大きく改変することなく利用するということで調査されていなかった農場の一部にガラス室（温室）を建設するため、宮崎大学として県教育委員会に委託して発掘調査を実施し、その結果の記録が今回刊行されることとなりました。前記の諸報告書を補完するものとして活用されることを願っております。

この調査を実施するにあたり御協力いたされた関係各位に対し深く謝意を表明します。

昭和60年6月5日

宮崎大学長 遠 藤 尚

例　　言

1. 本書は、宮崎大学構内遺跡発掘調査として宮崎大学農学部内のガラス室建設に伴い、宮崎大学が実施した平畠遺跡XXV区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は宮崎大学から依頼をうけ宮崎県教育委員会文化課が昭和59年7月5日～8月15日、9月25日～10月5日にかけて実施した。
3. 調査組織は次の通りである。

調査主体 宮崎大学

学長 遠藤 尚
事務局長 鮫島 弘治
経理部長 松山 千明
主計課長 原伸一
施設課長 小坪唱信
同補佐 落合正夫

調査員 菅付和樹、日高孝治（宮崎県教育委員会文化課）
調査協力 長津宗重、北郷泰道、近藤協、谷口武範（宮崎県教育委員会文化課）

4. 本書の執筆については、北郷泰道が調査の経過を執筆し、その他は菅付和樹・日高孝治で分担して行った。文責については各文末に明記した。
5. レベルは海拔絶対高である。
6. 土器の色調については、「新版標準土色帖」（農林省農林水産技術会議事務局監修）に掲った。

本文目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査の経過	1
第2節 調査の概要	1
第3節 遺跡の位置と環境	2
第4節 層序	4
第2章 遺構と遺物	6
第1節 縄文時代の遺構と遺物	6
1. 遺構	6
2. 遺物の出土状況	7
3. 縄文土器	8
4. 石器	22
第2節 弥生時代以降の遺構と遺物	31
第3章 まとめ	34

挿図目次

第1図 学園都市遺跡群位置図	2	第11図 縄文土器 (6)	18
第2図 発掘区位置図	4	第12図 縄文土器 (7)	19
第3図 層位図	5	第13図 縄文土器 (8)	20
第4図 グリッド別縄文土器出土量比較 図 (番号付土器)	6	第14図 縄文土器 (9)	21
第5図 グリッド別遺物出土量比較 図 (一括り上げ)	7	第15図 石器出土分布図	22
第6図 縄文土器 (1)	13	第16図 石鎌・石匙・石錐他	26
第7図 縄文土器 (2)	14	第17図 石斧・石庖丁様石器・剥片石器・輕 石	27
第8図 縄文土器 (3)	15	第18図 石錘	28
第9図 縄文土器 (4)	16	第19図 石錐・敲石・凹石	29
第10図 縄文土器 (5)	17	第20図 凹石・磨石・石皿	30
		第21図 弥生土器・土師器・陶磁器出土分	

布図	32	第23図 繩文後期土器実測図(1)	35
第22図 弥生土器・土師器・陶磁器	33	第24図 繩文後期土器実測図(2)	36

表 目 次

表 1. 土器片鍾度数分布	11	表10. 小型剝片石器計測表	50
表 2. 切目石鍾度数分布	23	表11. 石斧計測表	50
表 3. 打欠石鍾度数分布	23	表12. 石庖丁様石器計測表	50
表 4. 平坦遺跡出土繩文土器分類対照表	34	表13. 大型剝片石器計測表	50
表 5. 石器組成表	39	表14. 石錐計測表	51
表 6. 繩文土器観察表	43	表15. 敲石計測表	53
表 7. 土器片鍾度数分布	48	表16. 磨石計測表	53
表 8. 土製円盤・有孔円盤計測表	48	表17. 凹石計測表	53
表 9. 石錐計測表	49	表18. 石皿計測表	53

図 版 目 次

図版 1. 発掘区全景（北から）・西壁土層断面（南東から）	
図版 2. 繩文土器出土状況・弥生土器出土状況	
図版 3. 弥生土器（器台）出土状況・ピット検出状況	
図版 4. 繩文土器	
図版 5. 繩文土器	
図版 6. 繩文土器・弥生土器	
図版 7. 石錐・石匙・石錐他、石斧・石庖丁様石器・剝片石器・轆石	
図版 8. 石錐・石錐・敲石・凹石・石皿・磨石	

第1章 はじめに

第1節 調査の経過

大学農場用地内の埋蔵文化財包蔵地約100,000m²については、現況利用の前提から発掘調査を保留してきた。しかし、昭和59年3月22日に地域振興整備公団から宮崎大学へ用地が譲渡され、農学部の運営が具体的になるにつれ、幾つかの付帯施設が必要となり、昭和59年2月10日に施設課から県文化課に対し当面問題となるガラス室設置地336m²についての発掘調査費用見積の依頼がなされた。さらに、昭和59年5月25日付けで宮崎大学は工事についての発掘通知を提出し、県文化課は大学に対し工事前の発掘調査について通知した。それを受け昭和59年6月2日大学は発掘調査届を提出し、また文化課に調査員派遣を要請し、当初7月5日～8月15日までの予定で発掘調査に着手した。しかし、隣接するXXIV区からも予想されたとおり、多量の土器類が出土し、9月25日～10月5日まで調査を延長して実施することになった。

建設範囲内という限定された調査であるため問題がないわけではなく、工事計画区域と工事実施区域のずれ、周辺切り通し面に露出した包含層の保全、今後の全体的な土地利用計画など残された課題が多い。

(北郷 泰道)

第2節 調査の概要

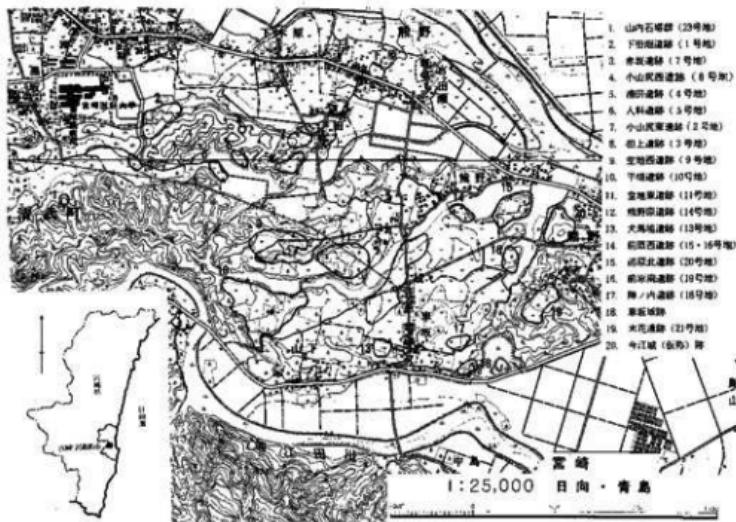
今回報告するXXV区は、その西隣りの昭和58年度調査のXXIV区同様建物敷地予定地という限定された部分的な発掘調査を行った所であり、遺跡としては同一のものである。調査は、XXIV区の成果をふまえて初めに表土から包含層付近までを重機によって剥ぎ取り、その後手作業で包含層を露出させた。前回のXXIV区では、南半部で緩傾斜の旧地形に沿って夥しい量の遺物が出土したが、それに伴う遺構は検出できなかった。そこで今回は、周辺の縄文時代の堅穴住居跡の平均的直径より小さな一辺2mのグリッドを設定することにし、座標北を基準に南北列を3～11、東西列をa～1とした。そして、出土した遺物については、口縁部・底部・有文や大破片の胴部・脚台・精製磨研土器・石器等主だった遺物や特徴的な遺物は位置と標高をおさえ、それ以外の小破片の遺物等はグリッド毎に取り上げた。出土遺物には、縄文土器・石器・弥生土器・土師器・陶磁器などがみられる。包含層は縄文時代の遺物が主体を占めるが、中に土質の異なる円柱形の遺構が検出でき、そこを中心に土師器類が出土している。また、弥生土器は発掘区の中央やや南東寄りに集中して出土しており、土色や土質の違

いなど確認できなかったが、遺構が存在しそれに伴っていたと考えられる。縄文時代の遺物は狭い発掘区の中でも分布密度に濃淡がみられ、XXIV区に近い西壁寄りと中央や北東寄りの焼土面が検出された付近に特に集中しているが、遺構は確認できなかった。また、発掘区の南東側は極端に遺物量が少なくなり、遺物包含層の東端部が確認できた。

(著者 和樹)

第3節 遺跡の位置と環境

宮崎学園都市遺跡群は、宮崎平野南端の低丘陵地帯の東辺部に位置する。現在の行政区では宮崎市大字熊野から宮崎郡清武町大字木原にまたがる一帯であり、鶴塚山系の丘陵のひとつが北東へのびた先端の舌状台地上及びその周辺に点在している。この台地は、谷底低地や多くの開析谷によって刻まれ、南の冲積地を加江田川、北を清武川が東流し日向灘へと注いでいる。そして、台地西端の丘陵地帯が広くゆるやかな傾斜面となる付近の約10万m²が、当初10号地遺跡と呼ばれた平畠遺跡である。平畠遺跡の北側は谷底低地が東から西へ入り、南側は急崖をなして台地がおわっているが、今昔を通じて水利の便は良かったものと思われる。



第1図 学園都市遺跡群位置図

この平畠遺跡は、標高41mから24mにあり、南東方向へ緩傾斜しながらも途中3段ほどの段丘を有している。今回調査したXXV区は、このうちの西から東へ遺跡を横断している比高差約1mの南面する段丘上に立地し、平畠遺跡のはば中央部にあたる。そして、この段丘を境に地形分類上、平坦地中位面がI（北西側）とII（南東側）とに分けられる。

平畠遺跡については、昭和59年までの調査の結果、縄文時代晚期前半の堅穴住居跡が55軒検出され、また、平安時代のものと考えられるカマド付堅穴住居跡2軒及び古代～中世の掘立柱建物跡24棟も確認されている。そして、遺構は検出できなかったが、弥生土器片や縄文時代早期の遺物も出土している。そのほかに、XXV区の北のXXVI区（道路敷部分）では縄文時代晚期後半の遺物が出土し、西のXXIV区（小型機械棟敷地）や農場予定地では調査や試掘の結果、縄文時代後期の遺物が出土しているが、遺構は確認していない。ただ、農場部分では農耕により遺物が円形の広がりをみて出土した箇所があり、この時期の堅穴住居跡の可能性がある。

一方、平畠遺跡の周辺では、学園都市遺跡群中最も早い時期に谷をへだてた北側の台地上で人々の生活が営まれたことが確認されている。この堂地西遺跡では、後期旧石器時代から縄文時代草創期にかけての遺物や集石遺構が検出され、さらに縄文時代早期の集石遺構もみられる。この時期になると堂地西をはじめ赤坂・小山尻東・前原西ほか各地の遺跡で集石遺構が営まれるようになる。しかし、その後遺跡周辺では前期以降しばらく縄文人の足跡が途切れ、海岸部の下着方遺跡（松添遺跡の一部）で中期の遺物がみられるのはかは、平畠の後晚期の集落や松添の貝塚の出現を待たねばならない。弥生時代になると後期になって漸く堂地東遺跡・熊野原遺跡B地区と集落が続けて営まれ、古墳時代にはB地区の南西の熊野原遺跡C地区や前原北・前原南の各遺跡に集落が営まれている。この時期の墓制を知る手掛かりとしては熊野原B地区に土壙墓が1基みられるのはかは、北方約1.3kmの地点に6世紀代を中心とする木花古墳群がみられる。その後、日向国が文献上に現われる頃になると、「延喜式」に記載された救麻駅やその官道に関連すると考えられる掘立柱建物跡群が、大字熊野に位置する前原南遺跡や平畠遺跡に営まれるようになる。そして中世には、車坂や今江の山城を臨める前原北・熊野原C地区・平畠・堂地西・堂地東の各遺跡に掘立柱建物跡群が営まれ、また、この時期の墓制として前原西遺跡の方形周溝墓や堂地東・小山尻西・山内の各石塔群がみられる。しかし、近世になると調査された遺構は極端に減り、わずかに浦田遺跡に住居跡が、堂地東遺跡に土壙墓群があげられるのみである。

なお、上述の遺跡のうち次の5遺跡が宮崎大学の敷地内に含まれている。浦田遺跡（実習

田の一部)、堂地西遺跡と堂地東遺跡(大学本部を含むキャンパスの一部と幹線道路)、熊野原遺跡C地区(駐車場や運動施設)、入料遺跡(田上川の河川敷や実習林の一部)である。これらの遺跡は大部分が記録保存され既に消滅したが、平畠遺跡は一部盛土保存箇所や敷地以外の所には現在も良好な状態で遺跡が残されている。

(著者 和樹)

第4節 層序

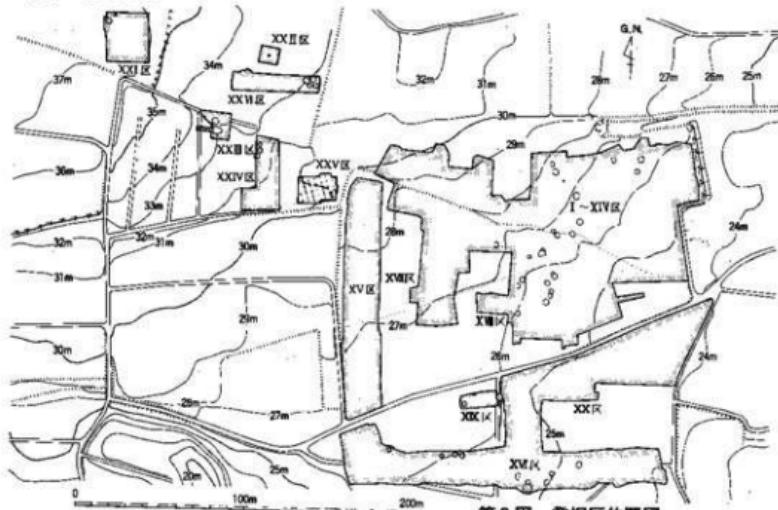
本遺跡は、昭和58年度に調査を行ったXXIV区の東側であり一連の遺跡としてとらえられるものであり、ほぼ同様な層序を呈している(第3図)。その層序は次のようになる。

0層～表土、I層～灰黒色土層(本遺跡の包含層で多量の縄文時代遺物を含む)、II層～黒褐色土層(炭化粒、バミス混入。土器を少量含む)、III層～暗褐色土層(無遺物層)、IV層～アカホヤ層となる。

[1]

一方XXIV区の基本層序は報告書によると、I層～表土、II層～暗褐色砂質土層(縄文時代の遺物を少量含む)、III層～にぶい黄褐色砂質土層(固く締っている。多量の縄文土器片・石器・剝片類を包含する)、III'層～暗褐色砂質土層(土器片をまばらに含み、II層より締っている)、IV層～黒褐色シルト質土層(遺物を含まない自然形成土層)、V層～褐色砂質土層(アカホヤ火山灰。無遺物層)となっている。

註1. 参考文献1

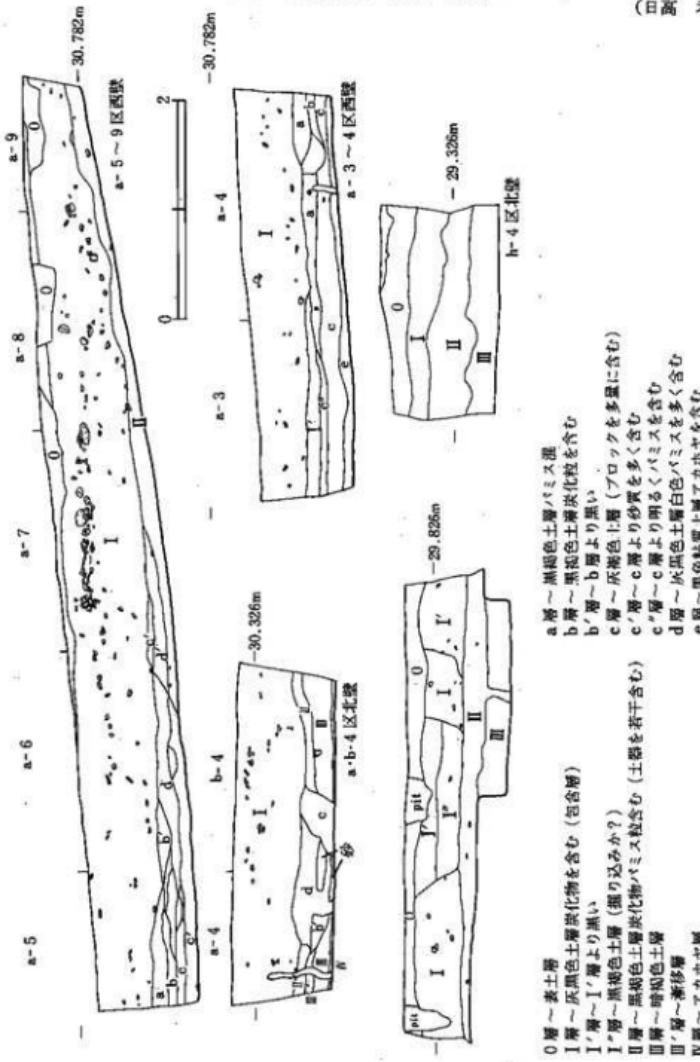


第2図 発掘区位置図

以上のようなXXV区(本遺跡)とXXIV区の層序を対比すると0層はI~II層、I層はIII層、II層はIV層、III層はV層、IV層はVI層に対比できる。

また地形的に層序は北西方向から南東方向に向かって傾斜している。

(日高 孝治)



第2章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺構と遺物

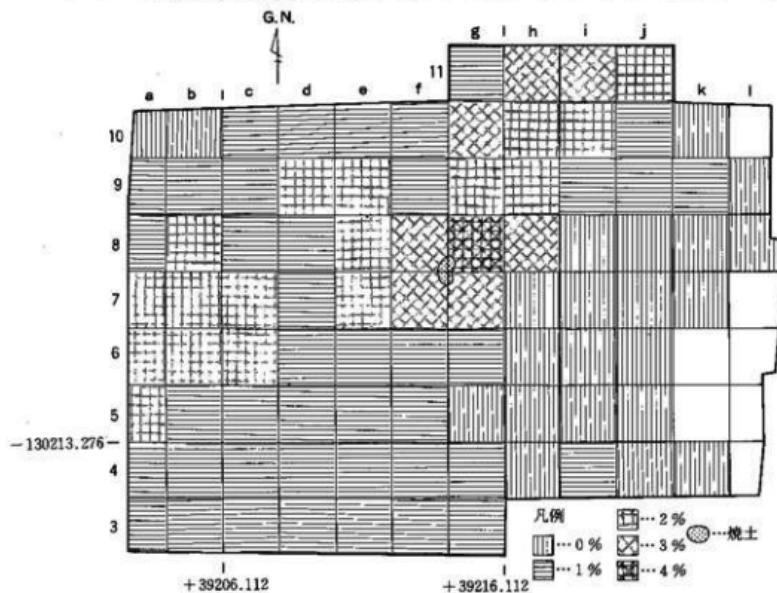
1. 遺構

焼土

f・g・7・8区境界で検出された。長径は南北方向で約105cm、短径は東西方向で約45cm、厚さは最も厚い所で約8cmを測る。包含層中より検出され、周囲及び焼土上部や下部からも縄文土器が出土した。焼土面直上付近の遺物としては図番号39や42、81など晩期前半の特徴を示すものが、また、焼土面下部付近の遺物としては2、9、12、99など後期後半的な特徴を示すものが出土している。

溝状遺構

a・b・4区北壁断面で検出されたもので、アカホヤ層にわずかにみられる掘り込みと包



第4図 グリッド別縄文土器出土量比較図(番号付土器)

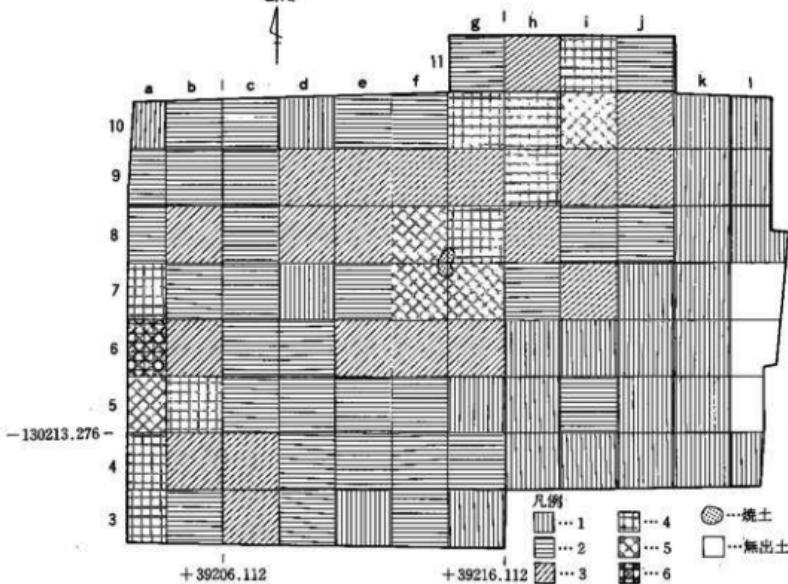
含層中に弧状にくぼんだ薄い白砂の層が観察されて確認できたものである。a - 6 区西壁でも同遺構を斜めに切ったと思われる層が観察できるが、遺構上面が包含層最下部で辛うじて区別できるのみで、溝幅や深さなど不明瞭である。上部を覆っている包含層の遺物の状態から繩文時代のものと考えられる。

2. 遺物の出土状況 (第4図～第5図)

XXV区は西隣りのXXIV区と一連の遺跡であり、斜面を利用した土器廃棄の場としての性格を持っている。出土した夥しい量の土器はその殆どが破片であり完形をなすものがない。また、石器類の多さもXXIV区同様にこの遺跡の特徴のひとつである。土器の中では、有文のものや精製磨研土器に比較的大破片のものがみられず、それに比べて無文土器には口縁部から胴部下半まである大破片のものが割合多くみられた。しかし、底部までわかる個体はみられなかった。

遺物の取り上げは、前述のとおり時間的な制約もあって位置と標高を記録して取り上げた

G.N.



第5図 グリッド別遺物出土量比較図 (一括取上げ。コンテナによる遺物量に基き作成)

ものと、一辺2mのグリッド毎に一括して取り上げたものがある。包含層が厚かったため数回にわけて掘り下げたが、遺物は発掘区の南東部分を除いて各グリッドほぼ万遍なく出土している。しかし、その出土量にはグリッドにより片寄りがみられる。第4図は位置と標高を記録し取り上げた縄文土器のグリッド別の出土量を表わしたものである。総点数に対する各グリッドの取り上げ点数の割合は最高で4%と少ないが、2%以上のグリッドをみると焼土を中心とする部分、h・i - 10・11区を中心とする部分、a - 5～7区を中心とする部分の3カ所に遺物量の集中がみられる。また、第5図はグリッド毎に一括取り上げした遺物のグリッド別出土量比を表わしたものであるが、焼土を中心とする部分、h・i - 10区を中心とする部分、a - 5・6区を中心とする部分の3カ所に遺物量の集中がみられ、ほぼ第4図の出土状況と重なり合う。

(菅付 和樹)

3. 縄文土器 (第6図～第14図、表6)

XXV区出土の縄文土器には深鉢形・浅鉢形を主体に台付鉢形土器の脚台や鉢部と思われる破片、台付皿形土器の脚台や皿部と思われる破片、そして、土器片を利用した土製品などがみられる。このうち土器については底部まで復元できる完形の個体は殆どなかったが、主体的に出土し口縁部から胴部下半まで図上復元可能なものは殆ど掲載し、また、特徴的なものは復元不可能な小破片のものでも掲載した。そして、個々の土器の特徴については別に観察表を付した。

では、次に器種毎に分類を行い出土縄文土器について述べてみたい。

1. 深鉢形土器

深鉢形土器のうち無文のものは比較的全体器形がわかるもの多かったが、有文のものは破片が小さく全体器形の不明なものが多い。

A類 丸く膨らむ胸部に外傾する短めの口縁部がつくもので、頸部のくびれに強弱がある。
また、頸部内器面に稜のあるものとないものがある。

A-1類 頸部内器面の稜が明瞭で胸部の張りと頸部のくびれが強い(1～4)。全て磨研土器であるが、2は磨きが粗雑で下地のナデが多くみられる。

A-2類 A-1類と同様の器形態をなすが、波状口縁である(30～32)。波頂部は4カ所になると思われる。30は波頂部にきざみを有する。31に粗雑な磨きがみられるほかは粗製土器である。

A-3類 A-1類と同様の器形であるが頸部のくびれが弱く内器面に稜のないもの多

い（5～14、16、54）。稜のあるものでも腹味なものになる。また、胸部の張りも弱いものが多い。54の有文土器は口縁端部の形態が若干異なるが同類とみなしてよいと思われる。

A-4類 頸部のくびれは弱いが内器面には稜がみられる（21～24）。胸部の張りが弱く頸部のくびれも弱いため、鉢形に近い形態をなす。

B類 ゆるやかに膨らむ胸部が頸部で軽くそばまり外傾する口縁部に続くもの。胸部と口縁部の接合法により2種に細分した。

B-1類 胸部に内側から口縁部を接合したもの（15、17、20）。これらはA類と同様の手法であり、頸部内器面に接合痕がみられる。

B-2類 胸部と口縁部の接合痕がみられず、頸部内器面もなめらかである（18～19）。

これらは主体をなす深鉢形土器である。次に小破片のものや少量出土のものを各特徴ごとに分類してゆく。

C類 「く」字形に稜をなして胸部が張出し、内傾する肩部に直立気味の口縁部を持つもの。晩期的な特徴を持つ土器である（25）。1点しか出土していない。

D類 胸部に稜を有し長めの口縁部が直立するもので、軽いヘラ磨きがみられる（27）。後期後葉の特徴を有する土器である。

E類 稜のない丸味のある胸部に長めの口縁部が直立する小型粗製の土器で底部は大きくなると思われる（26）。1点出土した。

F類 器面調整や施文に二枚貝の条痕や腹縁文を用いた土器で從来市来式と総称されたものである。

F-1類 口縁部が三角形に肥厚する古い様相を持つ土器（43～44）。44は波状口縁である。

F-2類 口縁部が「く」字形に屈曲する新しい様相を持つもの（45～46）。

F-3類 口縁部の屈曲が弱まり直立気味になるかまたは外反するもの（47～52）。

G類 破片が小さいが、頸部で「く」字形に屈曲し口縁部と頸部に文様帶を持つ波状口縁土器を一括する。

G-1類 口縁端部が三角形に肥厚するもの。波頂部にきざみを有する（29、63～65）。

63・64は口縁部片であるが断面や文様帶の特徴からこの類になると思われる。64は波頂部をきざみのかわりに押圧して平らにしている。65は肥厚が弱く口縁端部に文様帶

がみられないが同形態のものである。

G - 2 類 波頂部はみられないが、口縁端部が肥厚しないものである（68～69）。

なお、70はこのG類の頸部と思われる。

H類 軽く膨らむ胴部に頸部がわずかにくびれ口縁部が外傾するもの（53、55）。特徴のない無文土器である。53は波状口縁である。

I類 小破片であるが、晩期的な特徴を有するものを一括する。

I - 1 類 口縁部を肥厚させて無文の口縁帯をなすもの（72～73）。

I - 2 類 I - 1 類と同様の形態で有文のもの（74）。

I - 3 類 無文の尖帯を有するもの（75）。

I - 4 類 口縁部を三角形に肥厚させて沈線を1条施すもの（76）。

I - 5 類 多条沈線を有するもの（77）。

上記のはかに口縁部のみで全体器形の不明なものがある。

J類 口縁端部が若干肥厚するもの。

J - 1 類 口縁端部と下位に2カ所文様帯を有するもの（59～62）。61は端部の特徴からこの類に入れたが別類のものかもしれない。

J - 2 類 口唇部付近に文様帯を有する（57～58）。

J - 3 類 波頂部にきざみ、口縁端部に文様帯を有する（66～67）。G類の一部に含まれる可能性がある。

2. 浅鉢形土器

浅鉢形土器は精製磨研土器が主体を占める。しかし、出土量は少なく晩期前半の様相を持つものに割合大きな破片がみられる。

a 類 丁寧にナデ調整された塊形の器形態をなすもの（33～35）。33は口縁部がやや外反し沈線が施文される。

b 類 浅い皿状の胴部に内傾気味の口縁部が直立する（36～37）。有文と無文があるが、ともに精製土器である。いわゆる「高環形土器」の環部の可能性がある。

c 類 口縁帯に回線が施文されるもの（38、79）。38は6条、79は2条の回線を有す。

d 類 丸底と思われる浅い皿状の胴部に長くのびる頸部がつくもの。

d - 1 類 頸部が直行し口縁部が短く直立する（40～41）。同一個体の可能性がある。

d - 2 類 頸部が外反し口縁部が外傾して短く立ち上がる（39）。

e 類 口頸部が短く外反し深めの皿状の胴部に続くもので、頸部内面は稜をなす（80～81）。

f 類 口縁部が短く立ち上がり、胸部はふたつ
重ねた様になると思われる (42)。

g 類 胸部が脱く稜をなして張出し外傾した長
めの口縁部がつくもの (78)。

3. 底 部

深鉢形土器の底部と浅鉢形土器の底部がある。浅鉢形土器の底部には粗製のもののがなく、深鉢形土器の底部には精粗の別がある。

a 類 直立気味に胸部へ続くもの (92~93)。深鉢形土器 F 類の底部と思われる。

b 類 大きくひらいて胸部へ続く深鉢形土器の底部。

b - 1 類 底部内面に、若干段があるもの (82~88)。85は精製土器である。また、88は底部側面が張出すものである。

b - 2 類 底部内面に段がないもの (89~91、94)。89、94は精製磨研土器の底部と思われる。

c 類 大きくひらいて胸部へ続く浅鉢形土器の底部 (95~97)。精製磨研土器の底部と思われる。

4. 脚 台

脚台には 2 種類みられる。

a 類 高壺形土器あるいは台付鉢形土器と呼称される土器の脚台と思われるもの (100~106)。

b 類 台付皿形土器と呼称される土器の脚台 (112~117)。

このうち a 類には、体部として既述の浅鉢形土器 b 類もしくは 98~99 の波状口縁浅鉢形土器片が考えられる。また、b 類には 107~111 の皿状の形態をなす土器が考えられる。これらはいずれも装飾性の強い土器と思われ、a 類は精製土器であり、b 類には貼付けや沈線などによる文様や赤色顔料の塗布してあるものがみられる。

5. 土器片利用製品 (表1、表7~8)

118~125 は土器片を転用した鋸である。平畠遺跡では多くみられ、このXXV区でも未製品を含めて 35 個出土している。計測値については一覧表にまとめた。表中の型式は平畠遺跡 (3) の報告書に準じ、A 類は土器片の長軸に切目を入れるもの、C 類は溝を土器片に切るものである。B 類の長軸・短軸両方に切目を入れるものは出土していない。

126~128 は土製円盤と呼称されるものである。XXV 区では 5 個出土している。

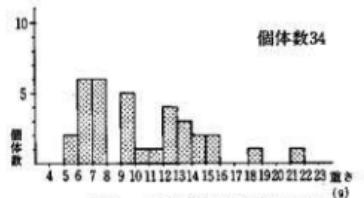


表1 土器片錐度数分布(重さ)

129～130は有孔円盤と呼称される筋縹車形の土製品である。2個出土している。

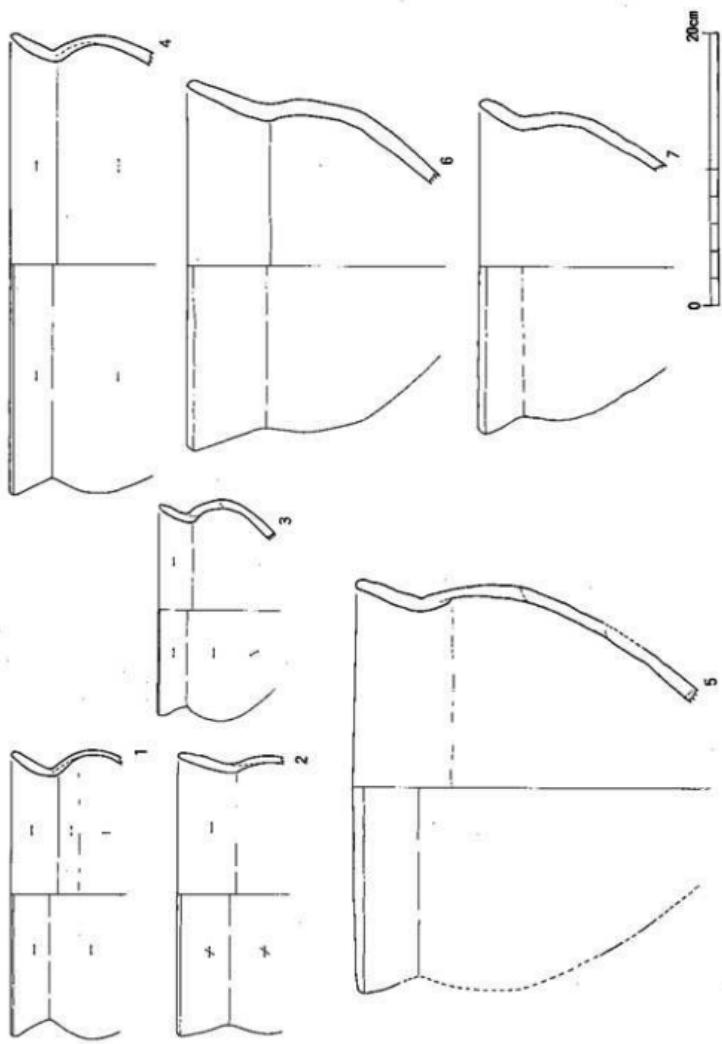
なお、これらはグリッド毎に一括して取上げた小破片の土器片中にもいくらか混在しており、整理が完了した時点ではさらにふえるものと思われる。

(菅付 和樹)

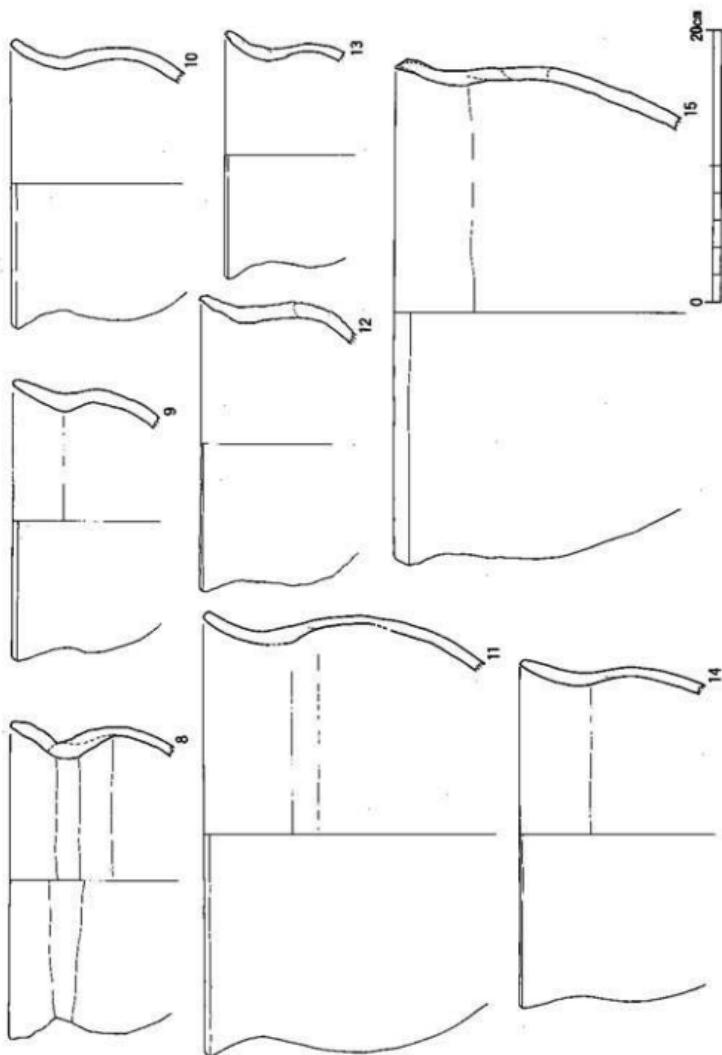
註1.2 完形が出土していないため、全形は不明である。いわゆる高环形をした土器と思われる。「台付鉢形土器」とした脚台は『縄文土器大成 3 後期』(講談社)に、「台付皿形土器」とした脚台は『大隅地区埋蔵文化財分布調査概報』(鹿児島県教育委員会 29集、1984)の中の「丸尾遺跡(末吉町)」に類似資料がみられるため引用した。

3 北郷奈道「4.石錐・土器片錐の総括」「平畠遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会 1985

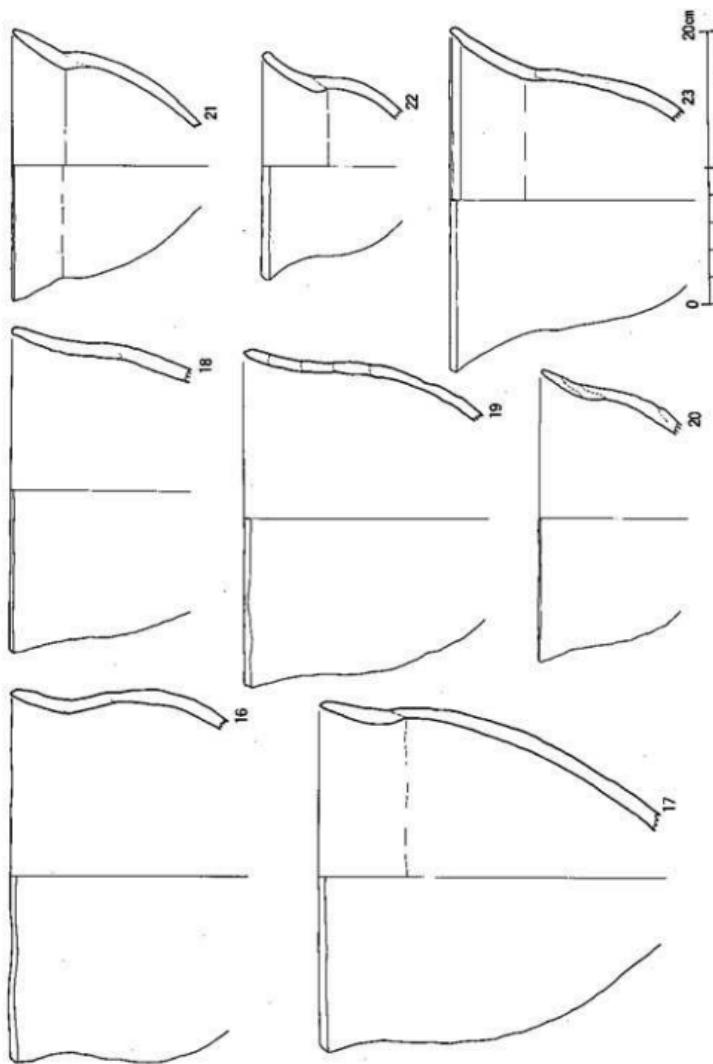
第6圖 漢文土器(1)



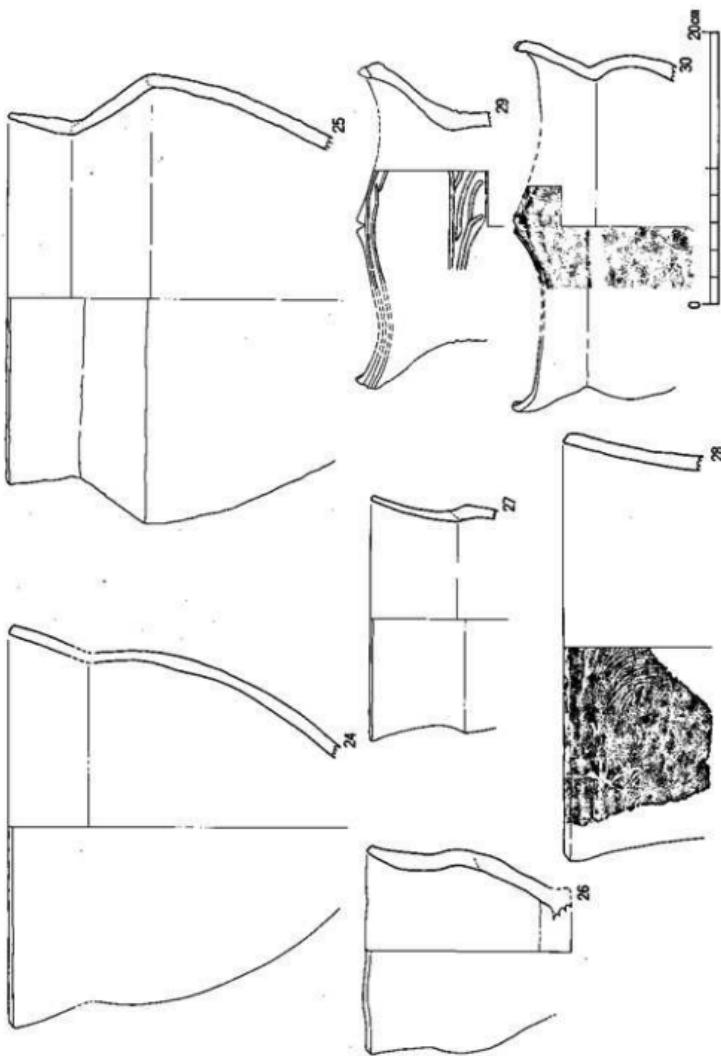
第7図 繩文土器[2]



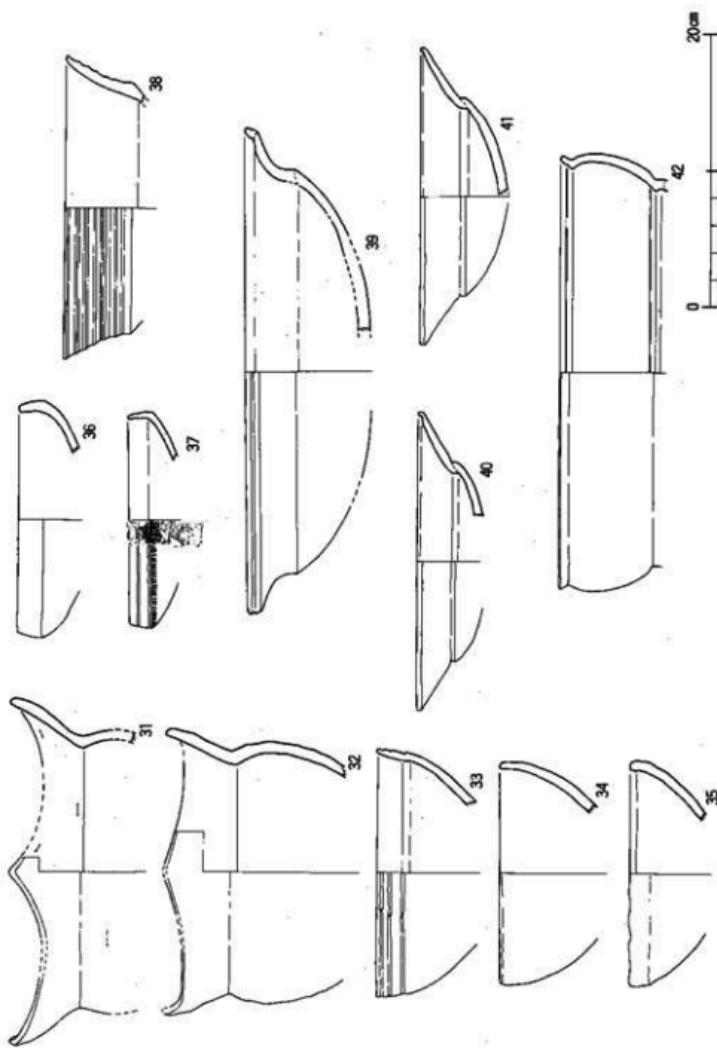
第8圖 繩文土器(3)



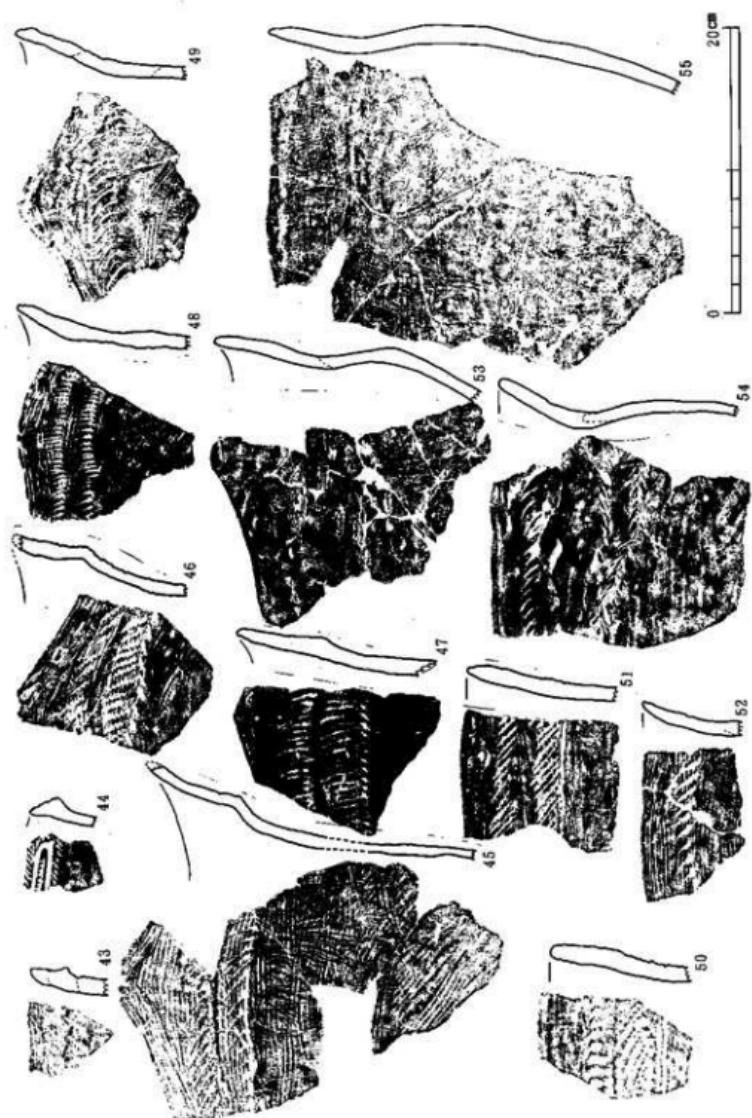
第9図 條文土器(4)



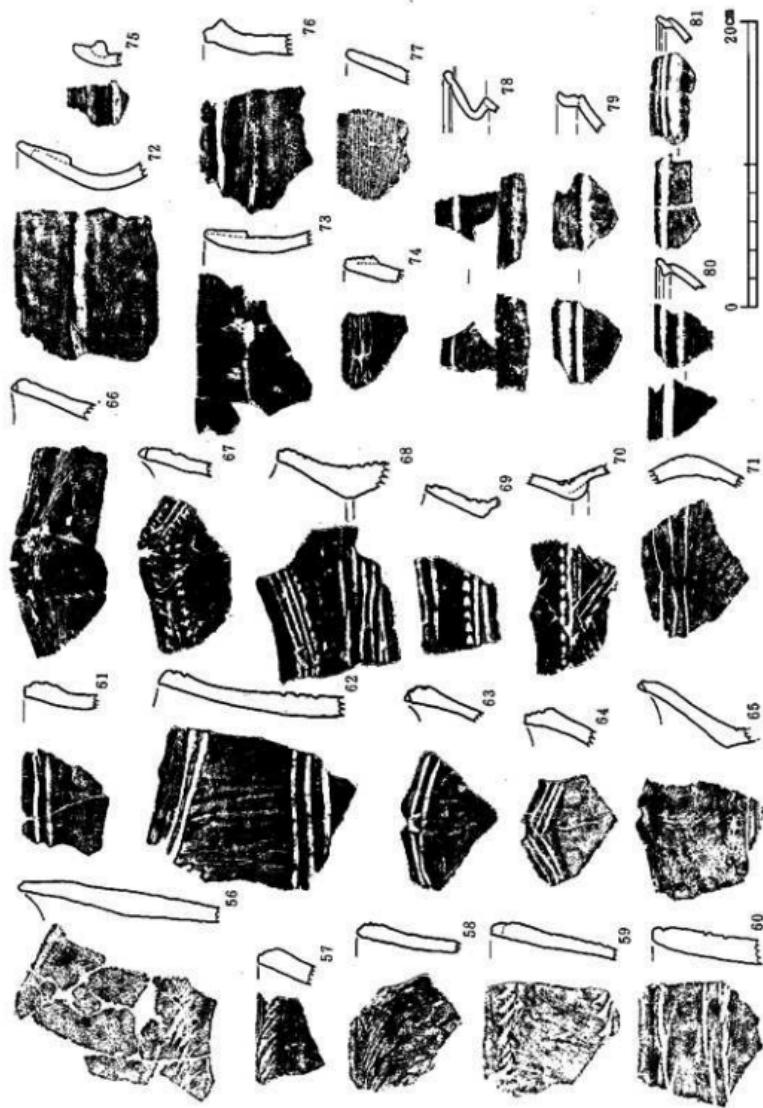
第10図 洋文土器(5)



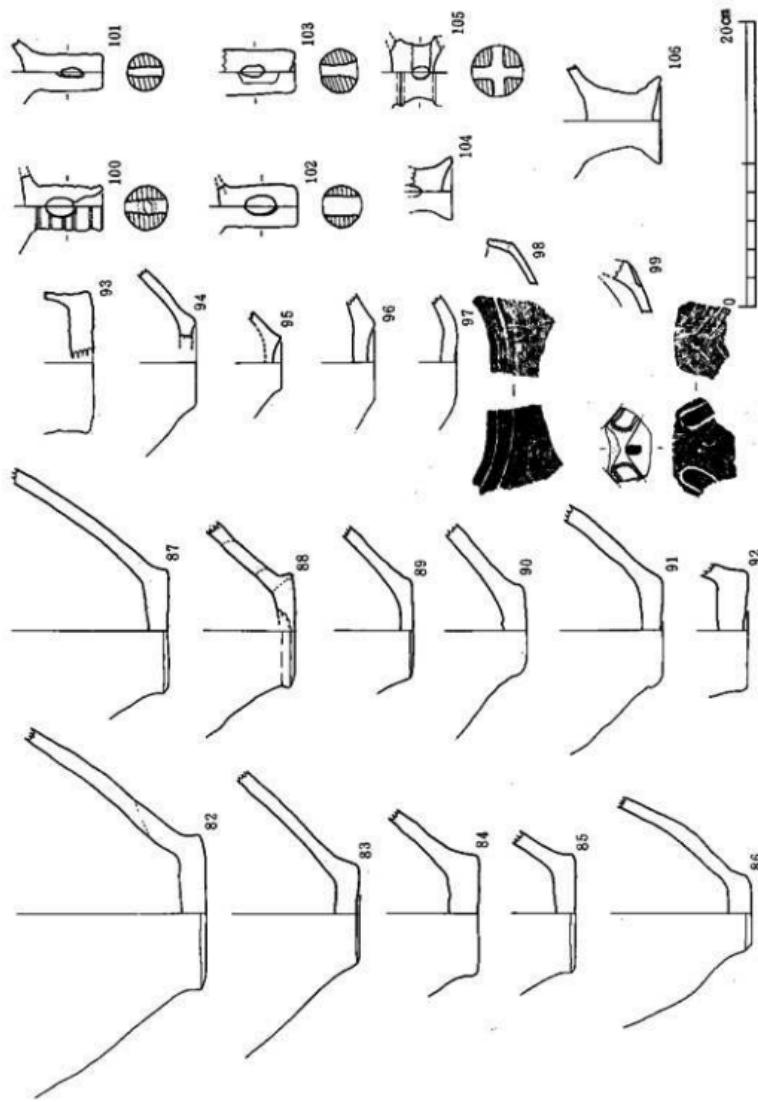
第11圖 繩文土器(6)



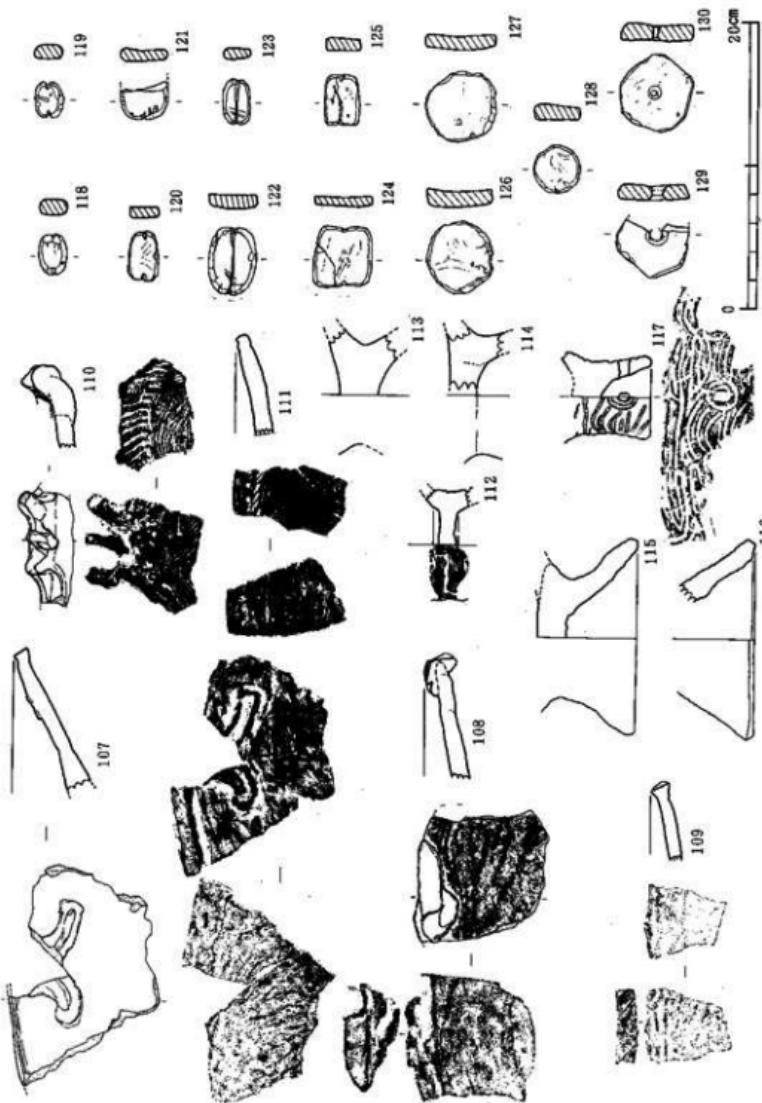
第12図 繩文土器(7)



第13図 編文土器(8)



第14図 條文土器(9)

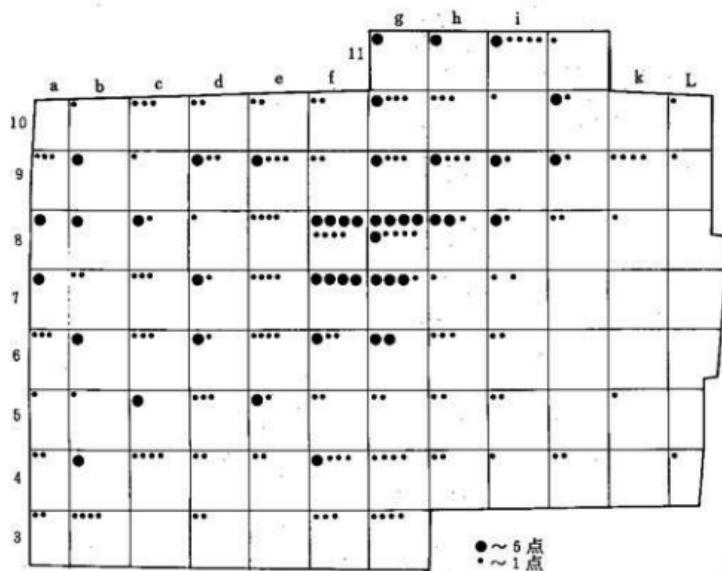


4. 石器(第16図～第20図)(表9～18)

石器はf・g・7・8区を中心として、ほぼ土器と同様の出土状況を呈している。器種としては、狩猟具である石鏃をはじめとして、漁撈具の石錐や調理・加工具の石匙・石錐・磨石・凹石・敲石・石皿等が出土している。また砂岩や頁岩等の剝片や礫も多量に出土している。その中で石器として確認したものは総数379点であった。

石鏃(第16図1～20)(表9)

石鏃は35点出土しておりそのうち18点が完形品である。出土状況としてはg-8区に5点出土しているのが最高で他は1～2点の出土である。形態的には三角形(A)、五角形(B)および砲弾型(C)に分類できる。また基部で見ると凹基(I)と平基(II)のものとがあるが凹基のものの方が多い。重さは0.3g～2.6gを示す。全長は平均2.15cmであるが7～9のように3cm前後と大型のものも数点出土している。石材ではチャートが多いが黒曜石、砂岩



第15図 石器出土分布図

等も使用されている。

石匙・石錐・その他小石器等
(第16図21~34) (表10)

石匙(21、22)は2点出土している。いずれもチャート製の横型のものである。

石錐(24~28)は6点出土している。形態的にみると錐部が細いものでつまみ部を形成しないもの(24、25)、つまみ部を形成するもの(26、27)があり、また錐部が太く頭部との区分が不明瞭なもの(28)も存在する。

24、26、27は砂岩製で28は頁岩製である。

その他小型の剥片石器では小型のスクレイパー(29、30)や卵形をしたスクレイパー(ラウンドスクレイパー)(23)も数点出土している。石材としては、主に黒曜石やチャートが使用されているが砂岩・頁岩も使用されている。また黒曜石の異形石器(31)やチャート製の磨製石器(32)も出土している。装饰品としては小玉(33、34)の類も出土している。

石斧(第17図35~41) (表11)

石斧は全部で24点出土しておりそのうち完形品は3点のみと少ない。38、40、41が磨製石斧であり、特に38は小型で石ノミ状の形態を有するものである。36、39は打製石斧で、36は偏平打製石斧とされるものであり、石材は火成岩の一種であろうと思われる。35は短冊形を成す局部磨製石斧である。

大型剥片石器(第17図42~48) (表12、13)

42~44は打製石庖丁とされるものである。偏平で両面とも擦痕が残っている。石材は頁岩を使用している。

45~48は剥片石器である。45は円形の剥片の周囲を一方向から打ち欠いたものである。

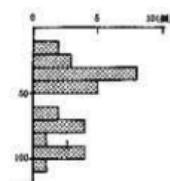


表2 切目石錐度数分布(%)

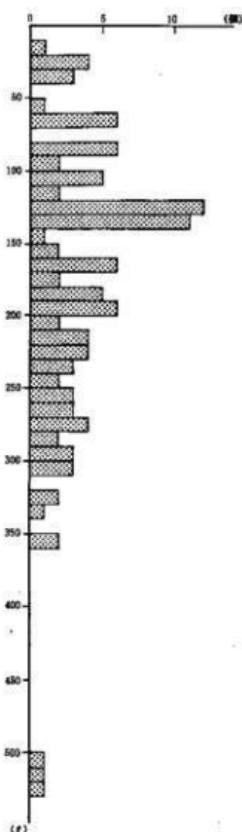


表3 打欠石錐度数分布(%)

47、48は縦長剝片を利用して一側縁に調整を加えたものである。3点ともスクレイパー的な使用が考えられる。また46はやや小型の円礫に加工したもので礫器の一種と思われる。その他横長剝片を利用したものやナイフ形石器的な使用をされたと思われる剝片も出土している。また細部調整は施されていないが使用痕を有する剝片も多く出土している。これらの剝片の多くは砂岩であるが、頁岩等も利用されている。

軽 石(第17図49、50)

49、50は軽石製品である。49は長さ10.5cm幅5.5cmをはかる細長い軽石の中をくり抜いて凹みを形成しているもので、舳先等の加工はなされていないが、鹿児島市草野貝塚で出土している舟形軽石製品に類似している。⁽³⁾ 50は欠損品であるが穿孔された軽石であり浮子の一種であろうかと思われる。

石 錘(第18、19図51~78)(表14)

石錘は本遺跡出土の石器群の中では最も多く出土しており、総数190点である。形態及び技法により分類すると長軸に切り目を有するもの(A₁)、短軸に切り目を有するもの(A₂)、長軸を打ち欠いたもの(B)、短軸を打ち欠いたもの(C)に分類できる。表2・3でみられるようにA類は小型品が多く100g以下がほとんどで中でも30~50gにピークがみられる。B・C類は小型・中型・大型に分けられるがその中でも中型(60~200g)が多く120~140gにピークがあるようである。石材としてはほとんどが扁平な砂岩を利用しておらず、その他の石材においても丸味を持つ扁平な石が利用されている。また凹石に転用されたもの(78)や敲石に転用されたもの(83)もある。

敲 石(第19図79~83)(表15)

敲石は35点出土しており、その中には柱状を呈し両端を使用しているもの(80)や扁平な石の側面全体を使用しているもの(82)、全体的に使用痕を有するもの、球に近い円礫で一ヶ所のみを使用しているものなど各種存在している。また側面のみを使用している敲石の多くは、磨石として他の部分を使用している。その他石錘より転用されたもの(83)もある。石材としては、他の器種は砂岩を多く使用しているが、敲石の場合、砂岩以外に花崗岩や頁岩等の硬質の石が利用されている。

凹 石(第19、20図84～86)(表17)

凹石は15点出土している。その中には若干凹んだだけのもの(84)もあるが、多くは両面がかなり凹むまで使用されている(78、85、86)。大きさとしては84、85程度のものが多いが、大型のもの(86)や小型のものも若干出土している。石材としては砂岩を一般的に使用している。

磨 石(第20図88、89)(表16)

磨石のみに使用された石器は12点出土している。ほとんどが砂岩を使用しており、やや偏平な川原石の平坦面を利用している。88、89のように二方向から使用されたらしく使用面の中央に棱を形成しているものもある。また前述したように敲石の中に磨石と兼用して使用されている場合があり、それらは硬質の石(花崗岩、硬質の砂岩等)が使用されている。

石 盆(第20図90、91)(表18)

石盆は全部で13点出土しているが、そのほとんどが割れおり完形品は1点のみである。90、91も破碎したものである。形態的には平盤状か全体に浅く凹むものである。石材は砂岩が利用されている。また91は隣接するn-8区と1-8区出土のものが接合したものである。

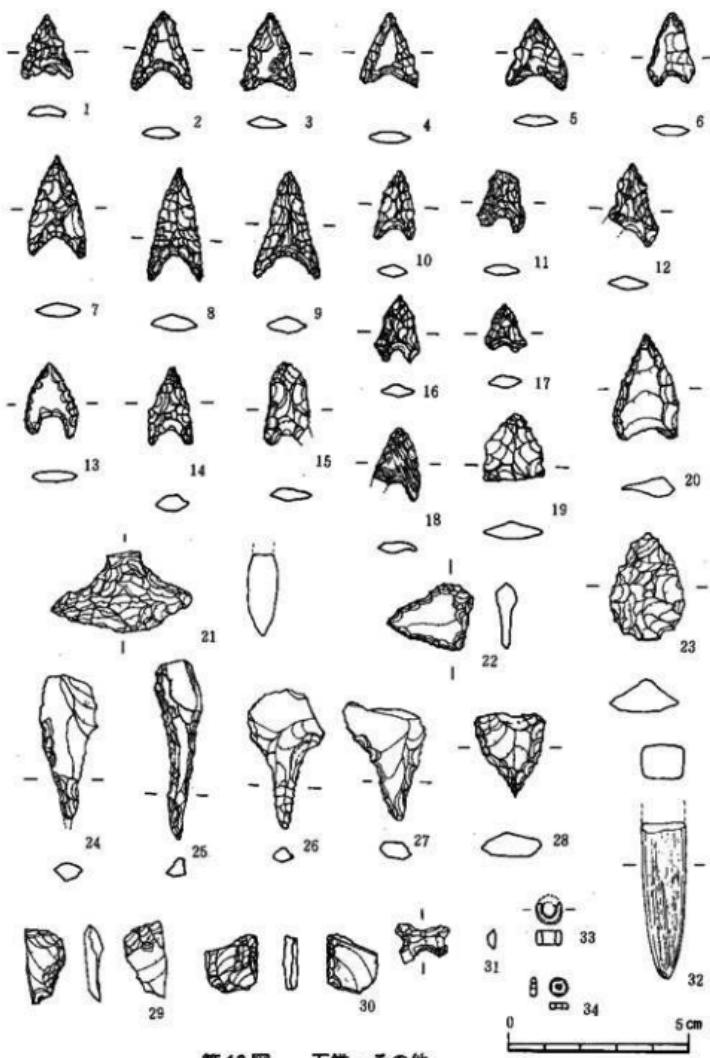
またその他、凝灰岩の石片が多く出土している。そのほとんどが偏平な形態をしており、用途については不明であるが、出土量的にみても何らかの生活上の用具として使用されていたのではないかと思われる。

(日高 孝治)

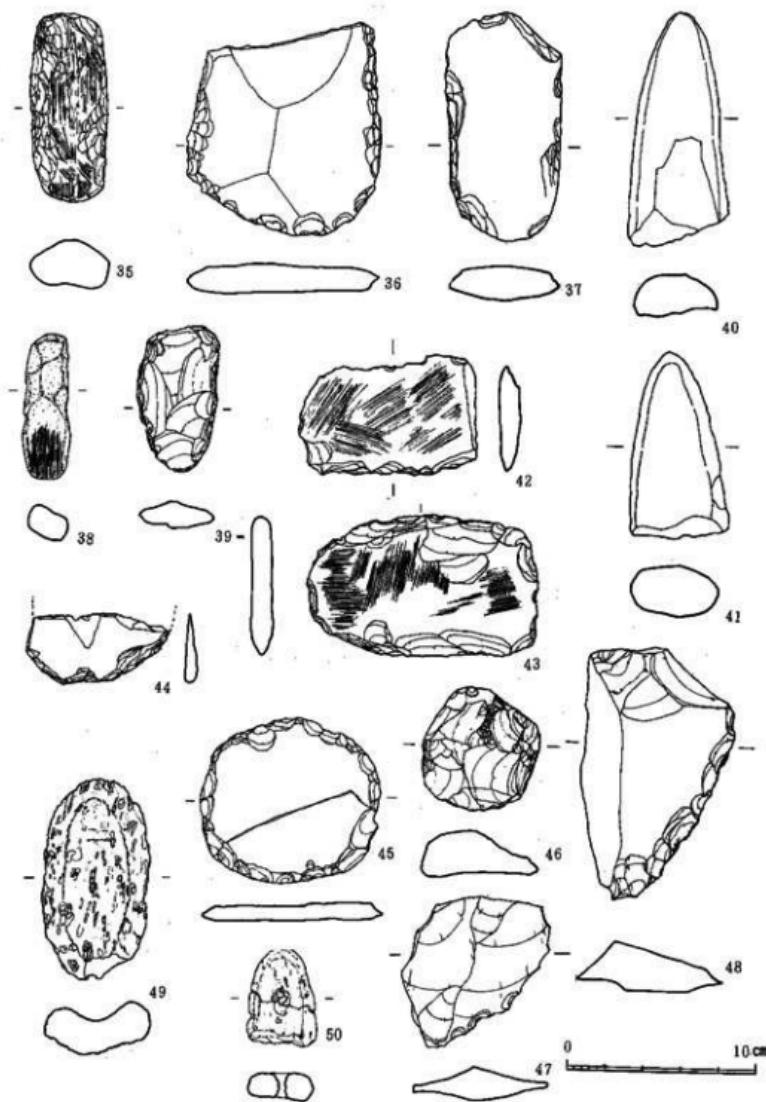
註1 参考文献1

2 山田町中村遺跡出土の石材と類似する(参考文献11)

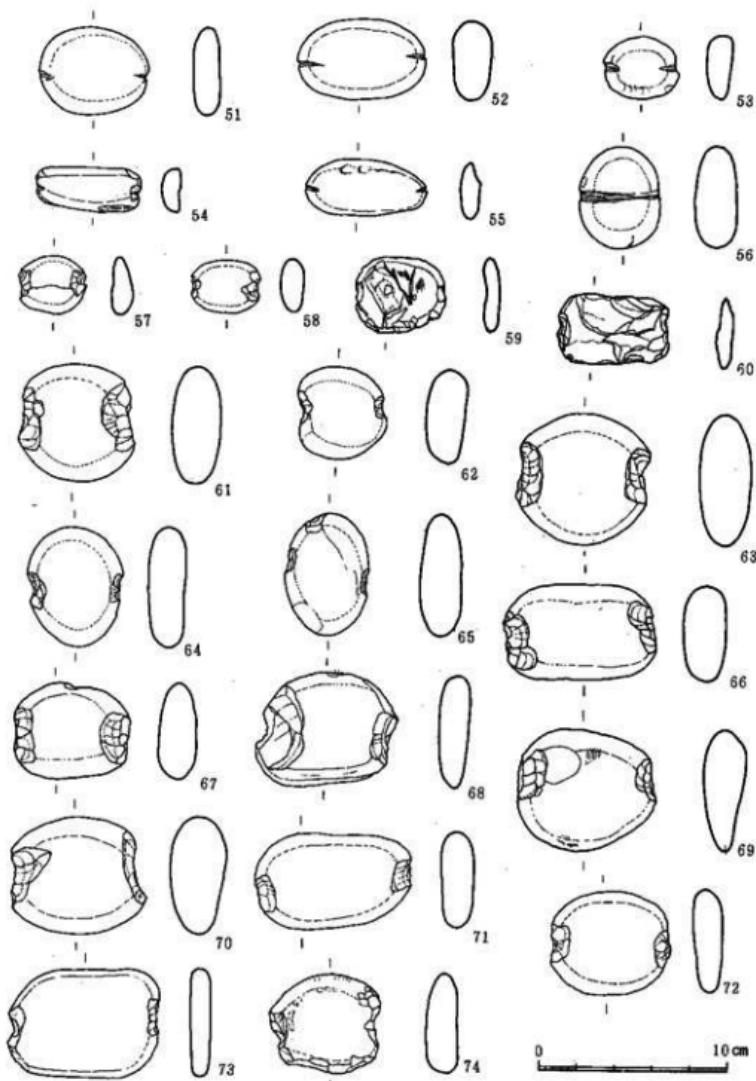
3 中島哲郎「草野貝塚」(昭和57年度概報)鹿児島市埋蔵文化調査報告書4 鹿児島市教育委員会 1983



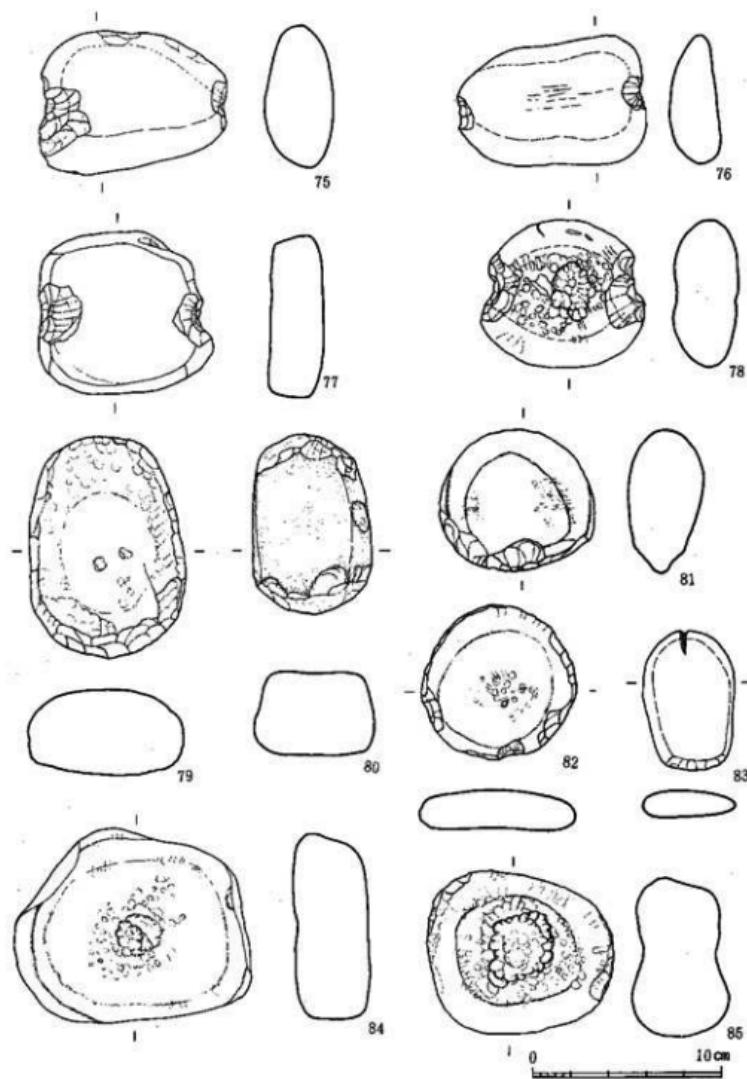
第16図 石鏃・その他



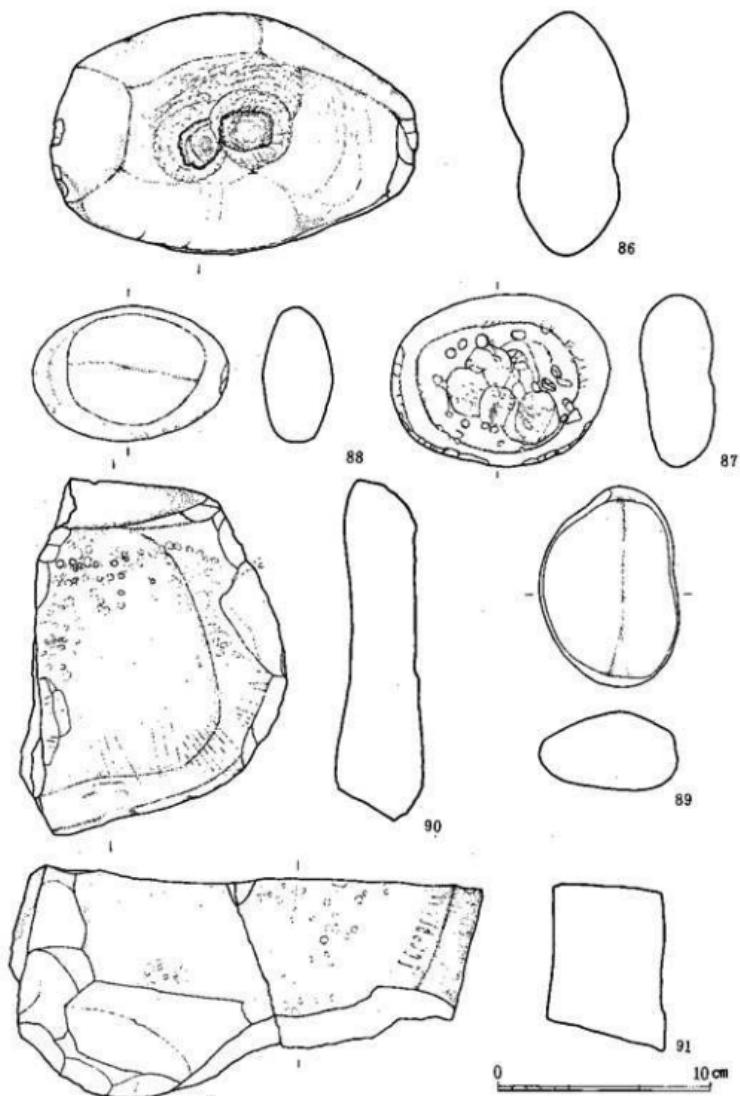
第17圖 石斧・石庖丁様石器・剥片石器・輕石



第18図 石錐



第19図 石錘・敲石・凹石



第20図 凹石・磨石・石皿

第2節 弥生時代以降の遺構と遺物

縄文時代以外の遺構としては第21図で見られるようにピットが数ヶ所で検出されているが建物が確認されるには至らなかった。

遺物としてはg～i～5区に弥生土器が集中して出土している。黒色土層内よりの出土であつたため周辺を精査し遺構の検出を試みたが確認できなかった。

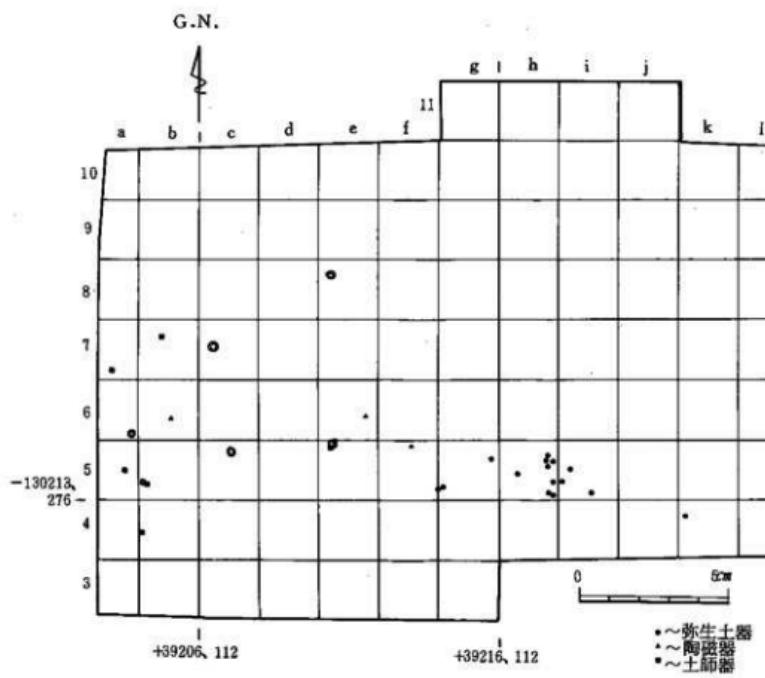
弥生土器（第22図1～12）

1～3は小型の壺形土器である。頸部がくの字状にくびれ、腹部が若干膨れるタイプで、1は外面にヘラミガキ、2はハケ調整が施されている。3は口唇部が折がり凹線が施されているものである。4は壺形土器の口縁部である。口唇部を上方へ若干つまみ出している。7、8は長頸壺の口縁部である。外面には縦方向のヘラミガキが施されている。5は小型の鉢形土器である。厚手の底部から一旦上方へ立ち上りやや丸味をおびながら外方へ立ち上るタイプである。口唇部は丸く收められており、外面はていねいなナデ、内面はハケ調整が施されている。6は器台である。底径が口径よりやや大きくなるタイプで、外面と内面の端部付近はヘラミガキが施されている。9は鉢なし壺形土器の底部である。10、11は高环の脚部である。10はゆるやかな曲線状に立ち上るもので、11は屈曲部を持ち、円柱状の脚部を有するものである。これらの弥生土器は焼成は良好で概ね色調は浅黄褐色～淡黄色を示し、胎土には2～3mmの大褐色・灰色の砂粒を含むものであるが、3の凹線文土器は色調がにぶい褐色を示し、調整にも他の土器と若干の違いがある。12は把手である。焼成、色調等が他の弥生土器とは若干異なるため土師器の可能性もある。

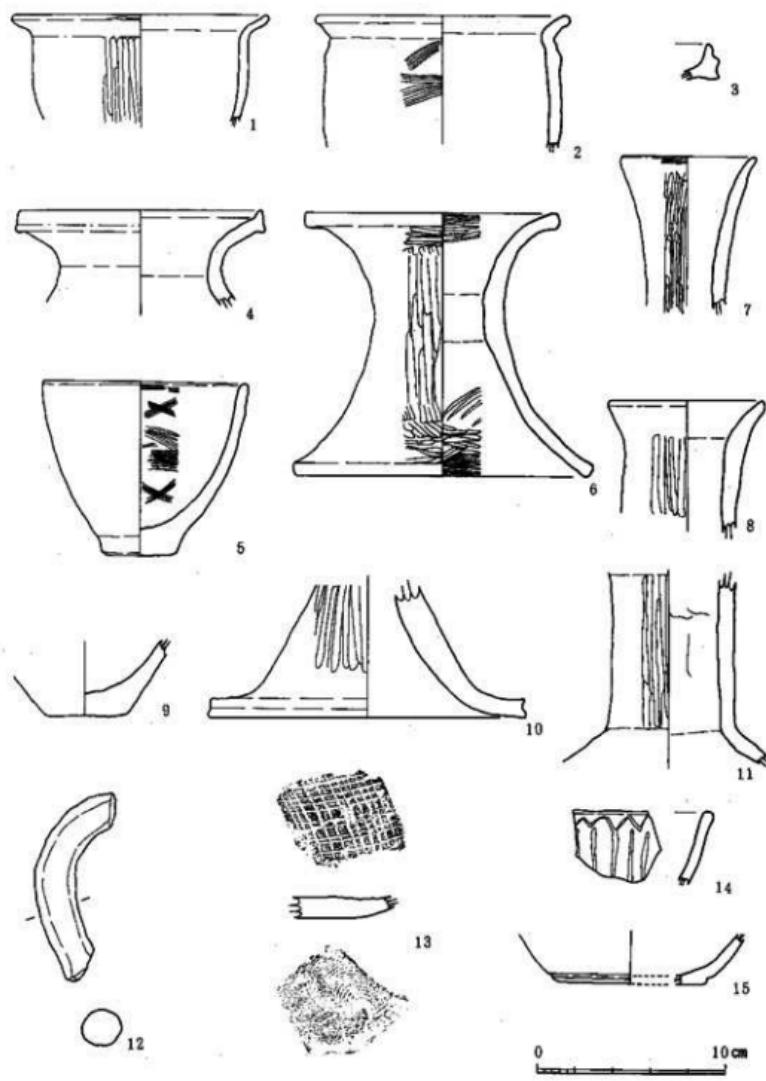
その他、陶器としては瀬戸のおろし皿(13)が出土している。⁽¹⁾ 色調は淡黄色を呈す。糸切り底である。口縁部の形態が不明であるため時期については不詳である。また青磁碗(14)が出土している。焼成が不良であるため色調は淡黄色を呈している。線描きの蓮弁を有するものである。土師器は数点出土しているが第21図に見られるように発掘区の西半分の区域で主に出土しており、e～5区においてはピットの上面より出土している。器種としては壺(15)小皿の類であり底部はヘラ切りである。

（日高 孝治）

註1. 大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）の御教示による。



第 21 図 梅生土器・土師器・陶磁器出土分布図



第22図 満生土器・土師器・陶磁器

第3章まとめ

縄文土器について

XIV区出土の遺物の中で主体を占めるのは縄文土器である。⁽¹⁾ 縄文土器については先に平畠遺跡の報告書の中で分類がなされているが、今回出土したXIV区の土器とは表4のように対応する。ではここで、XIV区出土縄文土器のうち比較的時期的な特徴を表わしている土器を中心に編年を試みたい。

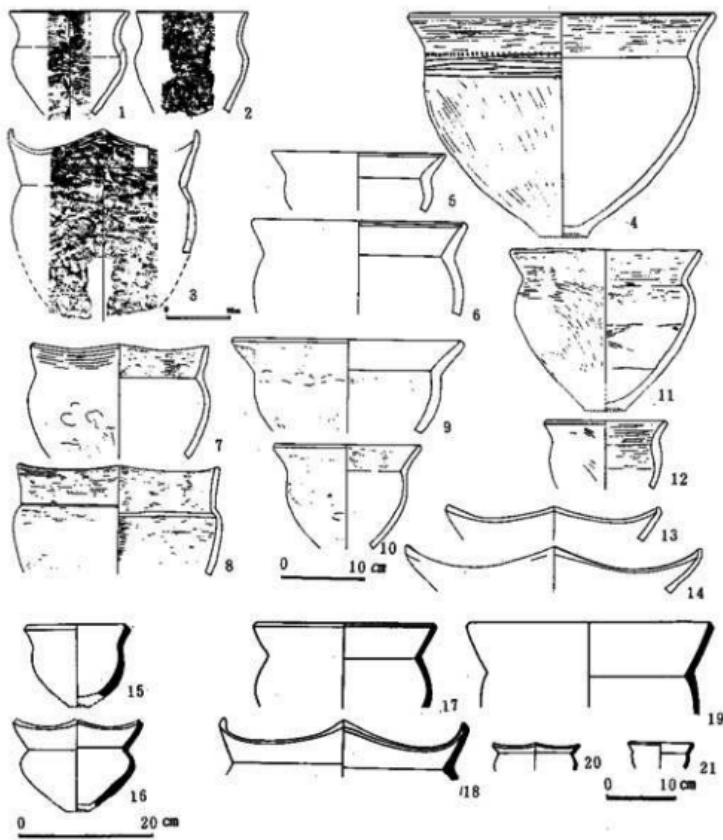
XIV区出土の土器はXIII区出土土器と同じく後期後半と晩期前半に中心をおくと考えられる。しかし、県内ではこの時期の資料が少なくXIV区で試みた様に県外に類例を求めるを得ない。先のXIII区では、第23図1~3の土器をもとに鹿児島県末吉町中岳洞穴出土の中岳1類

C土器中の第23図11の土器を手がかりに、共伴土器同図5~6や13~14に類似する片野洞穴(志布志町)、若宮遺跡(鹿児島市)出土西平式土器の波状口縁と平口縁の土器組成や土器形態(第23図15~16、17~21)が、大分県大野町駒方C遺跡で「東九州型の三万田式土器」として報告されている深鉢形土器(第24図1~8)に類似するものとし、このXIV区出土の1~3に代表される土器を三万田式期以降として位置付けたのであった。⁽²⁾

今回XIV区出土土器の中でA-1類とした精製磨研深鉢形土器は、第23図1~3のXIII区出土土器やXIV区の深鉢形土器A-3類の祖形となった土器と考えられる。器面調整がヘラ磨きを主体になされ、丸い頭部にくびれた頭部を持ち外傾する短めの口縁がつくその器形態は後期的な特徴を有するもので、同様の器形態をなす波状口縁深鉢形土器A-2類の31のような粗雑な磨きを持つものの存在を考慮した時、口縁部が短い点や口縁部内面に沈線のみられない点などの違いはあるとしても、「東九州型の三万田式土器」と同時期に位置付けできるものと考えられる。この深鉢形土器A-1類の中でも2は他の3点よりやや新しくなる可能性があるが、頭部が丸く頭部のくびれと頭部内面の継の明瞭なものを古式の様相とみると31を代表とする深鉢形土器A-2類もほぼ同時期と思われる。しかし、ほかの30・32がナデを主体とする点や30の波頂部に押圧きざみのみられる点などが時期差を表わすものか他の土器系統の影響があらわれているものかは資料が少ないため不明である。波頂部の押圧きざみ

XIV区	XIII区	型名(注記)
深鉢形A-2類	深鉢形C-3類	-
△ A-3類	-	-
△ A-4類	△ C-3b類	-
△ B-1類	△ B-1類	-
△ B-2類	-	-
△ F-2類	△ A-1類	-
△ F-3類	△ A-2類	-
△ G-1類	△ C-1類	-
△ I-1類	△ K-2c類 深鉢形D類	-
△ I-3類	-	△ C類
△ I-3類	△ K-3類	△ D類
△ I-5類	△ I-2b類	△ B類
波状形 c 類	波状形A-1類	-
△ d-3類	△ D類	-
△ e 類	△ E-2類	-
△ g 類	△ F-15類	-

表4 平畠遺跡出土縄文土器
分類対照表



第23図 繩文後期土器実測図(1)

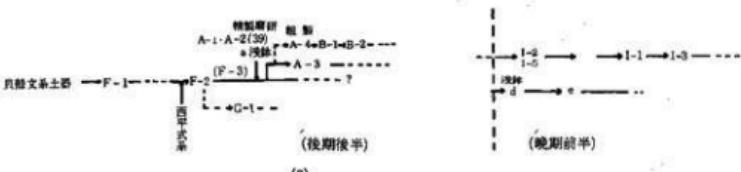
1～3 平烟遺跡 XIV区

4～14 中岳洞穴 (4---1類A、5～6---1類B、7～12---1類C、13～14---西平式)

15～16 片野洞穴 (西平式)

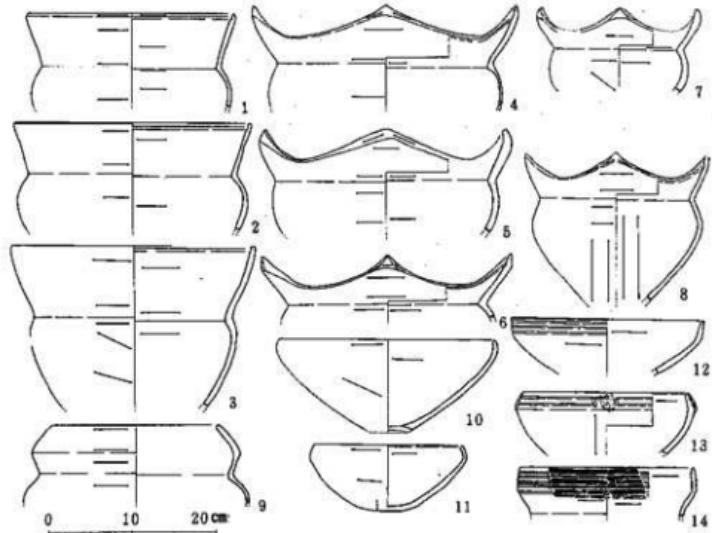
17～21 若宮遺跡 (西平式) ※実測図は各報告書による。

に関しては、深鉢形土器G-1類の29のように在地化した西平式系統の流れをくむ土器の影響も考えられるが、G-1類とA-2類の先後関係ははっきりしない。先述した洞部や頭部の形態からみた時 XIV区の繩文土器は次のように考えられる。



(3)

近年、本田道輝氏は「市来式土器」について書かれた中で市来式と西平式の共伴関係について述べておられる。それによると、市来式の方が主体となる草野貝塚や武貝塚などでは上層部で西平式が少量伴出するが、西平式が主体となる若宮神社遺跡や片野洞穴では市来式は少量伴出するのみであり、また、これら西平式が主体との遺跡では「純粹の西平式の他に器形や文様等に変化のみられるもの、在地土器文化との融合状態を示すもの等が見出される」とある。草野貝塚の上層部の市来式土器は主として口縁部が「く」字形に屈曲し華麗に装飾されるものであるが、IV区では深鉢形土器F-2類がほぼそれに相当する時期のものと考えられる。(4)このIV区は調整の上でナデ主体の遺跡であり磨研主体の遺跡ではない。しかし、平烟遺跡を含む東南九州が縄文後期には貝紋文系土器の影響の強い地域であったことを考慮すると、西平式が主体となる若宮遺跡や片野洞穴と同じ様相がここIV区でも精製磨研土器A-1類の



第24図 縄文後期土器実測図(2) 犬方C遺跡

※実測図は同報告書による。

影響をうけたナデ主体の深鉢形土器A-2・3・4、B-1・2類に少量の市来式系深鉢形土器F-2類の伴出という状況で現われるということを考えられよう。

さて、今回発掘したⅩⅣ区は約10m西隣りのⅩⅢ区と土器組成に若干違いが認められるため少々触れておきたい。遺跡としては、ともに土器廃棄場的な様相を示しており同一のものであろう。ⅩⅢ区でA-1類とした精製磨研の深鉢形土器はⅩⅣ区ではみられなかった。かわってⅩⅣ区でみられた胸部上位に洞部最大径があり長くのびる外傾した口縁部をもつものやそれに口縁帯のつく黒色磨研系三万田式相当の土器はⅩⅣ区では顕著にはみられなかった。また、ⅩⅣ区では数点しか出土しなかった第23図3や出土量の少なかった同図1~2等は、ⅩⅣ区では頸部のくびれや内面の稜、洞部の張りがよりしっかりした形で多数出土している（深鉢形土器A-2・3類など）。これらのことから、精製磨研土器系統の影響をうけたと考えられる土器についてはⅩⅣ区の方がⅩⅢ区よりやや古い様相を示しているようである。しかし、磨消繩文系土器についてみると、ⅩⅣ区は少量の洞部片などが出土しているだけだがⅩⅢ区は口縁部などがやや多めに出土している。

ⅩⅣ区や前回発掘区のⅩⅢ区は同一の傾斜面に立地しており、多数の石器類をも含めた遺物廃棄の場としての性格を持っていることは、先に述べたとおりである。ここが形成されるにあたって、当時この傾斜面に無秩序に遺物を廃棄したものか、あるいは限定された場所に廃棄を行ったものかなど多くの問題点が考えられるが、この両地区にみられる土器のわずかな時期差やⅩⅣ区の遺物出土状況の項で述べた3カ所の遺物集中箇所やそのうちの一カ所にみられた焼土の存在、さらに前回のⅩⅢ区での2カ所の一括出土繩文土器群の存在、そしてそのうちのⅡ群とした箇所のすぐ上部で出土した赤色顔料付着の精製磨研土器及び岩偶の呪術的性格、さらに高环形と考えられる土器の多さなどを考えると、この傾斜地には廃棄場所についてのある種の制限が存在し、超過すると場所を移してまた廃棄するというような廃棄法が行っていた可能性も考えられる。そして、それに伴う「ものおくり」的な儀式も行われていたのかもしれない。しかし、ⅩⅣ区の遺物集中箇所ごとの土器の整理を十分には終えていない現在、それを実証し得る程の資料がないためあえて可能性を述べるにとどめる。

以上、ⅩⅣ区出土繩文土器について未完の整理状況と周辺資料の不足のうちに若干の所見を述べてみた。不適当と思われる箇所や誤りも多々あるだろうが、今後資料の蓄積に伴い、徐々に修正を加えてゆきたい。最後に、深鉢形土器F-2類の「く」字形の屈曲を持つ波状口縁土器について少し述べて終えたい。このF-2類の波状口縁土器は先のⅩⅢ区でもみられたが、波頂部が欠損している例が多い土器である。これについては鹿児島県末吉町丸尾遺跡の

報告で「二次的に打ち欠かれ」たことが指摘されている。⁽⁵⁾丸尾遺跡の例では、波頂部が平らに欠損していたり、波頂部から外側へひと欠きしたような欠損のある波状口縁土器が多くみられ、その中に波頂部を焼成前に押して平らにしたもののが認められた。そこで、このような例から、波頂部に欠損のみられるものは故意に打ち欠いたためとされたのである。このような状況は平畠遺跡の⁽⁶⁾XIV・XV区でもみられる。⁽⁷⁾XIV・XV区出土のこの類の土器は波頂部が水平か波頂部から内側または外側へ向けて打ち欠かれたものが多い。そして、今回のXV区では、64の様に焼成前に波頂部を平らにした西平式系の影響をうけたとみられる土器や29・63・65のように波頂部に内側から押圧きざみをつけた土器が出土していることは注目に値し、あるいはこの影響を深鉢形土器F-2類の波状口縁のものはうけている可能性がある。

（著付 和樹）

石器について

XIV区出土の石器（礫・剝片を除く）は表9～18に示す通り総数379点で、その内訳は、石鎚35、小型剝片石器24、石斧24、打製石廻丁様石器3、大型剝片石器28、石鏟190、四石15、磨石12、石皿13である。その割合は表5で示す通りである。これは今回の発掘区（XIV区）の周辺の平畠遺跡の既発掘区と比較すると出土石器の様相は類似するものがあり、特に石鎚、石鏟でみると両者とも約1:5と数量的にも似通った状況を示していると言える。その中でも石鏟が多く石器群の中で約50%をしめている。その中も前述したように、小型の切り目を有するもの（A類）と大型が多い両端を打ち欠いたもの（B・C類）が、1:5程度の割合で出土している。これらの石鏟については、切り目のものだけを網鏟とする考え方⁽⁸⁾もあるが本遺跡や県内の串間市下弓田遺跡の出土例、大分県下の状況や、民俗例等を考えると、打ち欠きの石鏟も田中熊雄氏が述べられているように網の種類により使用されていたのではないかと考えられ、また北郷氏の述べられているように打ち欠き石鏟は太い紐を結びつけるのに適していると考えられる。これらの差別は大分県内の遺跡で砾石鏟は海岸部に集中し、切目石鏟は河川域に集中するという傾向が指摘されており注目されるものである。これを県内の遺跡で見ると平畠遺跡や下弓田遺跡等では砾石鏟の量が多く、内陸部の綾町尾立⁽¹⁰⁾遺跡や県外ではあるが鹿児島県宮ノ迫遺跡等では切目石鏟が多いという事実があり、同様のことが言えると思われる。

また特徴的なものとして、砂岩や頁岩等を素材とした剝片がかなりの量出土している。石器としては28点を数えるにとどまっているが、使用痕を有すると思われるものまで含むと約70点程度出土している。縦長剝片を利用しているものが多いが、中には横長剝片を利用して

いるものもある。これらの大半は剥片をそのまま利用しているというごく簡単なものである。このような剥片を利用した石器は綾町尾立遺跡や末吉町宮ノ迫遺跡等でも出土しておりほぼ縄文時代後期全般にわたってみられるものである。尾立遺跡の遺物は原始農耕と関連づけて考えられている。また、これらの剥片の石核や接合関係について今回は確認するまでに至っておらず、今後この時期の剝離技術を解明する上で検討を加えるべき問題である。

最後に全体的な石器組成を周辺の遺跡と比較してみると、表5でみられるように、貝殻文系土器群を主体とする下弓田遺跡では石錐が70～80%を占めており、また屋久島の一湊松山遺跡では敲石や磨石といった調理・加工用の石器が大部分を占めている。一方磨研系の土器群を主体とする陣内遺跡や大分県大野原台地の遺跡では、石錐と打製石斧が大量に出土するというある程度片よった状況を示している。本遺跡は石錐の量が多くを占めているが、打製石斧、石錐もある程度は出土しており、この時期にでてくる石器群がほとんど出土している状況である。これらの石器より本遺跡の生産活動を考えると、海や河川における漁撈を中心としながら、後背の山野における狩猟・採集を行うという幅広いものであったと推察できる。この豊かな生産活動の基盤の上により縄文的な遺物である岩偶や石刀等の遺物が存在

していたので
はないかと思
われる。

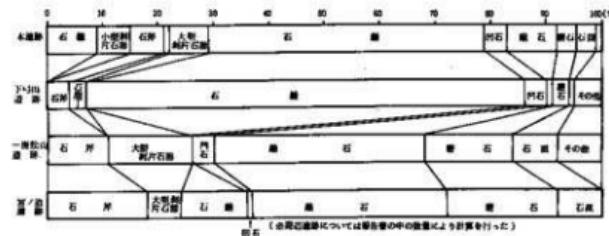


表5 石器組成表(%)

弥生土器・土師器・陶磁器について

本遺跡においては、小型の甕・鉢や壺・器台・高坏等がg・h-5区付近に集中して出土している。その集中度範囲からみて、遺構は確認できなかったが、土壇程度の大きさの遺構かと思われる。時期的には、鉢形土器や器台等からみて、学園都市遺跡群内の浦田遺跡のものに類似すると思われ、ほぼ弥生終末期に当ると思われる。の中でも凹線文の土器は若干異なり、胎土的には同様であるが、瀬戸内系の土器であろうと思われ、堂地東遺跡との関連が考えられる。これらの弥生土器の性格については、今後平畠遺跡の西側の部分が調査されて

いく段階で明らかになっていくものと思われる。

また、土師器や陶磁器は出土が少ないので、明確にとらえられないが、周辺のXIV区やXVII区等で出土しているものとほぼ同時期で古代末～中世初であろうと思われる。尚、青磁については若干時期が下り15世紀末から16世紀のものである。また、ピットの上面より土師器が出土しているので、ピットについては土師器と同時に考えられる。⁶⁰

(日高 孝治)

註12 参考文献1.

3 参考文献 8

4 この深鉢形土器F-2・3類については文献1で大隅半島の方に分布するのではないかと述べたが、志布志町ほか市来式の「く」字形の屈曲を持つ華麗なものが各地に出土しており、このF-2・3類は、華麗なものよりやや新しくなるのかもしれない。分布については東南九州あたりを今後注目したい。

5 参考文献12による。報告の中で市来式土器としてあげられた中にXIV区の深鉢F-2及びF-3類に類似する「く」字形口縁の土器がある。この両者は共伴しているようで時期差はないのかもしれない。

6 中村耕治氏の御教示による。氏はXIV区出土の完形に近いこの類の波状口縁土器についても波頭部の打ち欠きを指摘された。

7 棚辺誠「縄文時代の漁業」堆山閣 1984

8 参考文献 1

9 参考文献 19

10 参考文献 20

11 田中熊雄「石錐考」『宮崎大学開学記念論文集』1953

12 参考文献 1

13 参考文献 19

14 参考文献 21

15 参考文献 22

16 参考文献 22

17 参考文献 22

18 参考文献 22

- 19 参考文献 19、22、23
- 20 貝川光夫他「陣内遺跡」日向遺跡総合調査報告第2編 1962
- 21 参考文献 13
- 22 谷口武範「浦田遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会 1985
- 23 長津宗重「堂地東遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会 1985
- 24 参考文献 1

参考文献

1. 北郷泰道・菅付和樹・日高孝治「平畠遺跡」宮崎学園都市遺跡発掘調査報告書第2集 宮崎県教育委員会 1985
2. 河口貞徳「南九州後期の繩文式土器——市来式土器——」考古学雑誌42-2 日本考古学会 1957
3. 河口貞徳「草野貝塚発掘報告」鹿児島県考古学会紀要第1号 鹿児島県考古学会 1952
4. 河口貞徳「第3章第2節 若宮遺跡」『鹿児島のおいたち——先史時代——』鹿児島市 1955
5. 河口貞徳「鹿児島県片野洞穴」「日本の洞穴遺跡」平凡社 1967
6. 河口貞徳「中岳洞穴」末吉町教育委員会 1980
7. 本田道輝「市来式土器」「西之表市納曾遺跡」鹿児島考古第12号 鹿児島県考古学会 1978
8. 本田道輝「市来式土器」「繩文文化の研究 4」雄山閣 1981
9. 山崎純男・島津義昭「九州の土器」「同 上」
10. 富田祐一「三万田式土器」「同 上」
11. 日高孝治・北郷泰道「中村遺跡」山田町文化財調査報告書第1集 宮崎県北諸県郡山田町教育委員会 1983
12. 池畠耕一・中村耕治「大隅地区埋蔵文化財分布調査概報」鹿児島県埋蔵文化財調査報告書(29)鹿児島県教育委員会 1984
13. 牧尾義則・坂本嘉弘・吉留秀敏「第2章 駒方C遺跡の調査」「大野原の先史遺跡」大分県大野郡大野町所在遺跡群発掘調査報告書 大分県文化財調査報告第65編 大分県教育委員会 1984
14. 前川威洋『九州繩文文化の研究』前川威洋遺稿集刊行会 1979
15. 山崎純男「西日本後・晩期の農耕」「繩文文化の研究 2」雄山閣 1983

16. 「道具と技術」『縄文文化の研究 7』雄山閣 1983
17. 別府大学考古学研究室「古闕遺跡」『古保山・古闕・天城』熊本県教育委員会 1980
18. 島津義昭他「天城遺跡」『同 上』1980
19. 石川恒太郎他「下弓田遺跡」日向遺跡総合調査報告第1輯 宮崎県教育委員会 1961
20. 大分県『大分県史 先史篇 I』 1983
21. 鈴木重治「尾立の石器」 宮崎県文化財調査報告書第14集 宮崎県教育委員会 1969
22. 長野真一「宮ノ迫遺跡」 末吉町文化財調査報告書2 末吉町教育委員会 1981
23. 出口浩他「一湊松山遺跡」 上屋久町埋蔵文化財調査報告書 上屋久町教育委員会 1981
24. 鈴木重治・賀川光夫「陣内遺跡」日向遺跡総合調査報告第2輯 宮崎県教育委員会 1962
25. 鈴木重治「松添貝塚発掘調査報告書」宮崎市文化財調査報告書第2集 宮崎市教育委員会 1974

表 6 繩文土器觀察表

回 数	地 名	面 積 (面積合 計 ha)	面 積 面		色 調		文 種		植 土	成 度	内 名	備 考
			外 面	内 面	底面	外表面	内表面	外表面				
26	深津 底 部 (115)	口縫部はよこナデ 縫部はたてナデ 底部はよこナデ	よこナデ	ナデ	にぶい 黄褐色 ビニル 底色	にぶい 黄褐色	—	やさきめがけめ 1.3m以下後の砂粒を含む	良好	a-6区	開拓面に入戻りあり	
27	深津 底 部 (115)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではよこナデ	丁寧なよこナデ	—	底面褐色 黒褐色	—	—	やさきめがけめ 1.3m以下の白色や茶色の砂粒を含む	良好	b-7区	精耕作土器 口縫部下草から開拓面にかけてスス付着	
28	深津 底 部 (364)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	よこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	さわやかめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	b-11区	口縫部一帯は付着 口縫部下半にスス付着	
29	深津 底 部 (364)	口縫部 底部 はよこナデ	口縫部一帯はよこナデ 底部一帯は粗 底部はよこナデ	—	にぶい 褐色	にぶい 褐色	—	底面は不 規則に化粧 底面に化粧	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	b-6区	精耕作土器 口縫部一帯は付着 口縫部下草から開拓面にスス付着 底部は4.5m未か
30	深津 底 部 (364)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	よこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	底面褐色 底面はささ 底面に化粧	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	c-7区	開拓面 口縫部底部と底面にスス付着 底部は4.5m未か
31	深津 開拓上 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	—	—	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	f-3区	開拓面 開拓面 開拓面にスス付着 底部は4.5m未か
32	深津 開拓 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	にぶい 黄褐色	にぶい 褐色	—	—	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	c-7区	放牧用 土器 底面 底面に付着 底面にスス付着 底部は4.5m未か
33	浅津 開拓 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	丁寧なよこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	口縫部化 底面に化粧	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	i-8区	外観は美化している 小、開拓土器と思われる
34	浅津 開拓 部 (15)	丁寧なよこナデ	よこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	—	—	良好	b-11区	—
35	浅津 開拓 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	暗褐色	褐色	—	—	—	良好	b-10区	精耕土器
36	浅津 開拓 部 (15)	丁寧なよこナデ	丁寧なよこナデ	—	浅黄色	胡蝶褐色	—	—	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	c-9区	精耕土器
37	浅津 開拓 部 (15)	丁寧なよこナデの上 部 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	丁寧なよこナデ	—	にぶい 褐色	にぶい 黑色	—	底面は不 規則に化粧 底面に化粧	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	b-9区	精耕土器
38	浅津 開拓 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	にぶい 根 色	にぶい 根 色	—	—	—	やさきめがけめ 少しひんやりとした風味を含む	良好	e-10区	精耕用土器
39	浅津 開拓 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	底面褐色 底面褐色	—	—	—	—	良好	g-7区	精耕用土器 丸底か 底部附近は黄化が著し
40	浅津 開拓 部 (15)	上 部 へラミガキ	丁寧なよこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	—	—	良好	e-7区	精耕用土器 丸底か 底部附近は黄化が著し
41	浅津 底 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	丁寧なよこナデ	—	根 色	黒褐色	—	—	—	良好	f-8区	精耕用土器 丸底か 底部の可能性
42	浅津 開拓 部 (15)	よこナデ	よこナデ	—	灰褐色	底面褐色	—	—	—	良好	g-7区	精耕用土器 丸底か 底部附近にスス付着
43	深津 口縫部	よこナデ	よこナデ	—	根 色	にぶい 根 色	—	—	—	良好	a-8区	—
44	開拓 口縫部	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	にぶい 褐色	にぶい 褐色	—	—	—	良好	b-11区	底面
45	開拓 口縫部 底 部 (15)	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	灰褐色	にぶい 黑色	—	—	—	良好	c-7区	底面 口縫部は全面 全体にうす手である
46	開拓 口縫部	底部 の上 部 へラミガキ	—	—	にぶい 褐色	野井褐色	—	—	—	良好	f-6区	底状口縫 底状口縫は欠損
47	開拓 口縫部	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	にぶい 黃褐色	桜 色	—	—	—	良好	d-9区	底状口縫 底状口縫は平たく仕上げる
48	開拓 口縫部	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	にぶい 赤褐色	野井褐色	—	—	—	良好	d-6区	底状口縫 底状口縫全体にスス付着
49	開拓 口縫部	口縫部 底部 はよこナデ 1.5m以下ではあるい はよこナデのアゲ	—	—	底面褐色 底面褐色	底面褐色	—	—	—	良好	d-6区	底状口縫 底状口縫は丸く仕上げる
50	開拓 口縫部	よこナデ	よこナデ	—	にぶい 黃褐色	—	—	—	—	良好	a-10区	底状口縫

固有号	部	部位	表面異常			色調			文様			附 土	構成	アリド名	備 考	
			外表面	内表面	底面	外表面	内表面	外表面	内表面	外表面	内表面					
51	腰鉢	口縁部	よこ方向の貝殻条痕 の上をよこナデ	上こナデ	—	黄褐色	褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	—	きめが細かい 黄色の砂利及びミリ 以下の砂利を多く含む	c-11区		
52	腰鉢	口縁部	よこ方向の貝殻条痕 の上をよこナデ	—	—	黄褐色	褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	黄褐色	—	ややきめが細かい 無定形土を含む 1~2mmの砂利を含む	d-3区	腰縫文の一部にスス 付着	
53	腰鉢	口縁部 脚下部	口縫部一帯にはよこ ナデはよこ方向のナデ 無定形土を含む	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 白色の砂利及びミリ 少々の1~2mmの砂利を含む	b-5区	腰縫文に無 定形土と砂利を含む 手前側に化粧土	
54	腰鉢	口縁部 脚 部	口縫部一帯にはよこ ナデはよこ方向のナデ 無定形土を含む	—	—	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	—	ややきめが細かい 1~3mmの大粒砂利を含む	i-11区		
55	腰鉢	脚 部	黒いよこナデ	黒いよこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 黒いよこナデは褐色の 砂利及びミリ大粒の砂 利を含む	良好	b-11区	
56	腰鉢	口縁部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 1~3mmの砂利を含む	良好	e-9区	波状口縫
57	腰鉢	口縁部	黒いよこナデ	黒いよこナデ	—	褐褐色	褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	—	きめが細かい 無定形土を含む 1~2mmの砂利を含む	良好	g-8区	
58	腰鉢	口縁部	よこナデ	よこナデ	—	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	褐褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	f-6区	
59	腰鉢	口縁部	口縫部はよこナデ 口縫部はよこ方向の ナデ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	a-10区	
60	腰鉢	口縁部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	a-10区	
61	腰鉢	口縫部	口縫部はよこナデ 口縫部はよこ方向の ナデ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	j-10区	口縫部厚部にスス付 着
62	腰鉢	口縫部	口縫部はよこナデ 口縫部はよこ方向の ナデ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	d-6区	波状口縫 腰縫文の下部に黒い 斑紋がある所に剥離あり
63	腰鉢	口縫部	よこナデ	よこナデ	—	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	灰褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	k-7区	波状口縫 粗粒土帶
64	腰鉢	口縫部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	j-6区	波状口縫 腰縫文を押して平ら にしている
65	腰鉢	口縫部 脚 部	口縫部は丁寧なよこ ナデ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	h-3区	波状口縫 腰縫文上部にスス付 着
66	腰鉢	口縫部	口縫部はよこナデ 口縫部はよこ方向のナ デ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	i-4区	波状口縫 腰縫文の一部にスス 付着
67	腰鉢	口縫部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	h-7区	波状口縫 腰縫文下部にスス付 着
68	腰鉢	口縫部 脚 部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	e-8区	波状口縫 腰縫文底部にスス付 着
69	腰鉢	口縫部 脚 部	よこ方向の貝殻条痕 の上をよこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	d-3区	波状口縫 粗粒土帶
70	腰鉢	脚 部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	a-5区	細粒土帶 腰縫文にスス付 着内表面に化粧土 付着
71	—	脚 部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 1~2mmのうす褐色 の砂利を含む	良好	g-8区	
72	腰鉢	口縫部 脚 部	口縫部はよこナデ 口縫部はよこへラナデ	—	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 白色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	i-7区	
73	腰鉢	口縫部	よこナデの上を粗粒 土帶よこラナデ	よこナデ	—	灰褐色	灰褐色	—	—	—	—	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	k-9区	口縫部と口縫下部 にスス付着
74	腰鉢	口縫部	よこナデ	よこナデ	—	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	褐色	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	k-9区	
75	腰鉢	口縫部	よこナデ	よこナデ	—	灰褐色	灰褐色	—	—	—	—	—	きめが細かい 褐色の砂利及びミリ 1~2mmの砂利を含む	良好	n-8区	

回数	品目	表面調査				色調文様				地土		樹皮	グリッド名	備考
		外表面	内表面	底面	外表面	内表面	外表面	内表面	地表	樹皮	樹皮			
76	裸株	口輪部 粗いよこナデ	よこナデ	—	にぶい 褐色	褐色	口輪部に 口輪部に 口輪部に 口輪部に	口輪部に 口輪部に 口輪部に 口輪部に	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白 白 白	良好	I-3区 ススキ村	寒帯の下部に ススキ村	
77	裸株	口輪部 上こナデ	よこナデ	—	赤黄褐色	灰褐色	多肉斑化	—	さめが細かい 1.5ミリ以下の細胞を含む	良好	e-6区	粗製研磨土		
78	浅株	口輪部 口輪部は よくへうり よこナデ	口輪部へ口輪部は よくへうり よこナデ	—	淡黄色	灰褐色	—	口輪部に 口輪部に 口輪部に 口輪部に	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白 白 白	良好	b-6区	精製研磨土	
79	裸株	口輪部 よこへラミガ ナデ	よこへラミガ ナデ	—	淡褐色	褐色	—	口輪部に 口輪部に	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	b-10区	精製研磨土	
80	浅株	口輪部 よこへラミガ 例 例	口輪部はよこ へラミガ 例 例	—	墨褐色	灰褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	f-7区	精製研磨土 例 例	
81	浅株	口輪部 よこナデの上 部へ よこナデ	よこナデの上 部へ よこナデ	—	暗褐色	墨褐色	—	口輪部に 口輪部に 口輪部に 口輪部に	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白 白 白	良好	f-8区	精製研磨土	
82	深株	口輪部 よこナデ (108)	よこナデ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向に 口輪部はよこ なで	褪色	灰褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	a-7区	平底	
83	裸株	口輪部 よこナデ	—	外表面は無葉地の 内表面は円形方向に 口輪部はよこ なで	褪色	灰褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	f-8区	完熟、平底	
84	裸株	口輪部 (82)	よこナデ	一方の板子 の上をよこ なで	褪色	褪色	—	—	さめが細かい 1.5ミリ以下の細胞を含む	良好	f-8区	完熟、平底		
85	開株	口輪部 (84)	丁寧なたて ナデ	方向のナデ (半光沢ナデ)	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	a-2区	平底	
86	裸株	口輪部 (63)	丁寧なよこ ナデ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向 によこ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	I-7区	完熟、平底	
87	裸株	口輪部 1方向へのヘ ケメジ	よこナデ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向 によこ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	b-1区	完熟、平底	
88	深株	口輪部 (80)	たてナデ	よこナデの上 部へ よこ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向 によこ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	b-1区	完熟、平底
89	裸株	口輪部 (63)	たてへラミガ ナデ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向 によこ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	g-9区	精製研磨土 上部へ 有機物質に吸着 している	
90	深株	口輪部 (63)	丁寧な下はた なで	外表面は無葉地の 内表面はよく はなれ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	B-5区	完熟、平底 有機物質に吸着 している	
91	裸株	口輪部 (73)	よこナデ	外表面は無葉地の 内表面はよく はなれ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	J-11区	完熟、平底	
92	裸株	口輪部 粗いよこナ デ	粗いよこナ デ	外表面は無葉地の 内表面は円形方向 によこ	浅褐色	浅褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	b-8区	わざわい上げ 式底質の平底	
93	裸株	口輪部 (100)	よこ方向の板 いき板底質	よこナデ	外表面はナデ 内表面は円形方向 にナデ	褪色	褪色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	d-3区	平底
94	裸株	口輪部 (41)	丁寧なたて ナデ	内・外表面とも 内・外表面とも 丁寧なナデ	赤褐色	褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	b-8区	地盤上層 有機物質に化 物質	
95	浅株	口輪部 (28)	丁寧なあふ み	外表面は円形方向 にあふみ	墨褐色	—	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	I-10区	精製研磨土 上部	
96	浅株	口輪部 (55)	たてへラミガ ナデ	→←方向の丁 家のナデ	外表面はよこ方向 にへらミガナ	墨褐色	にぶい 褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	I-10区	精製研磨土 上部
97	浅株	口輪部 (46)	丁寧なたて ナデ	よこナデ	内・外表面はとも に丁寧なナデ	淡褐色	灰褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	J-10区	沙生地を有する 沙生地を有する
98	-	口輪部	丁寧なよこナ デ	口輪部はよこ なで	—	にぶい 褐色	にぶい 褐色	沙生地に 沙生地に 沙生地に 沙生地に	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白 白 白	良好	b-11区	精製土質 底質の水質	
99	-	口輪部	よこなよこナ デ	よこナデ	—	にぶい 褐色	にぶい 褐色	沙生地に 沙生地に 沙生地に 沙生地に	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白 白 白	良好	f-8区	精製土質 底質の水質	
100	-	脚台	よこへラミガ ナデ	へラミガナ	くりぬき後無剥離	暗褐色	—	—	沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する 沙生地を有する	白 白	良好	d-10区	精製研磨土 完熟	

試験番号	地形	器種	基面調査			色調			文様			地土	地式	グリッド名	備考	
			外表面	内表面	底面	外表面	内表面	外表面	内表面	外表面	内表面					
101	—	脚台(21)	丁寧なたてナダ	円形方向に丁寧なナダ	丁寧なナダ	にぶい 緑色	にぶい 緑色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	良好	i-11区	耕翻土質、完形		
102	—	脚台(28)	丁寧なたてナダ	円形方向に丁寧なナダ	丁寧なナダ	明赤褐色	明赤褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	良好	f-6区	耕翻土質、完形		
103	—	脚台(27)	たてヘラミガキ	—	円形方向のナダの上を 四方に二ヶ所	にぶい 緑色	にぶい 緑色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	ややめがめが細かい 白色の細胞粒を含む	良好	c-3区	耕翻耕研土質	
104	—	脚台(44)	たてまはよ ヘラミガキ	—	円形方向にヘラミガキ	明赤褐色	明赤褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	b-9区	耕翻熟土質	
105	—	脚台	よこナダ	ナダ	円形方向に ナダ	明赤褐色	にぶい 緑色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	ややめがめが細かい 白色の細胞粒を含む	良好	f-7区	上部、側面とも 欠損	
106	—	脚台(60)	たてナダ	円形方向にナダ	円形方向にナダ	にぶい 緑色	にぶい 緑色	—	—	—	—	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	i-11区	ほぼ完形 やや大形である	
107	—	丘部	—	口縁部によ り内側へ 凹凸がある ヘラミガキ	—	にぶい 緑色	赤色調	赤色	赤色	赤色	赤色	まあめが細かい ガラス状の細胞壁を含む その上に	良好	e-9区	赤色調は赤土か	
108	—	丘部	—	上部と下部 方向のナダ	—	赤色	にぶい 緑色	—	—	—	—	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	g-10区		
109	—	丘部	よこナダ	—	口縁部によ り内側へ 凹凸がある ヘラミガキ	—	にぶい 赤褐色	—	—	—	—	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	c-3区		
110	—	丘部	—	口縫隙付近 と内側と 外側と 方向の貝殻	—	明赤褐色	明赤褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	黒褐色	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	a-5区	直状口縫か	
111	—	丘部	—	上方の貝 殻表面の上を ヘラミガキ	—	明赤褐色	明赤褐色	—	—	—	—	まあめが細かい 白色や白色不透明な 細胞粒を含む	良好	d-5区		
112	—	脚台	よこナダ	円形方向にヘ ラミガキ	円形方向にヘ ラミガキ	—	かざ状沈 積文	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の細胞粒を含む	良好	i-9区	丘部内表面には 窓がある	
113	—	脚台	よこナダ	円形方向にナ ダ	円形方向にナ ダ	赤色	赤色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の細胞粒を含む	良好	b-6区		
114	—	脚台	揃いよこナダ	円形方向にヘ ラミガキ	円形方向のナ ダ	—	—	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の白色や白色 の細胞粒を含む	良好	h-9区		
115	—	脚台(138)	よこナダ	—	円形方向にナ ダ	赤色	赤色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の白色や白色 の細胞粒を含む	良好	j-11区	ほぼ完形	
116	—	脚台(135)	よこ方向の貝 殻表面	—	上方の貝 殻表面	明赤褐色	明赤褐色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を多く含む	良好	h-10区		
117	—	脚台(53)	よこナダ	円形方向のナ ダ	たて方向のナ ダ	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色	赤色	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	b-8区	透し孔は4カ所 と思われる。	
118	七面 片端	脚印片	ナダ	ナダ	—	にぶい 緑色	にぶい 緑色	—	—	—	—	まあめが細かい ガウス状の細胞粒を含む	良好	f-7区	完形。楕円形	
119	土器 片端	脚印片	ナダ	ナダ	—	にぶい 緑色	—	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	R-11区	完形。楕円形	
120	土器 片端	脚印片	丁寧なナダ	丁寧なナダ	—	にぶい 緑色	—	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	f-8区	完形。楕円形	
121	土器 片端	脚印片	丁寧なナダ	丁寧なナダ	—	褐色	赤黃褐色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	c-6区	半次 耕翻土質片端 楕円形	
122	土器 片端	脚印片	ナダ	ナダ	—	にぶい 緑色	にぶい 緑色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	f-5区	完形。楕円形 片端の部分のみ 透視感がある	
123	土器 片端	脚印片	貝殻表面の上 をナダ	粗いナダ	—	にぶい 緑色	—	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	a-6区	完形。楕円形 片端の上部のみ 透視感がある	
124	土器 片端	脚印片	粗いナダ	丁寧なナダ	—	にぶい 黄褐色	にぶい 黄褐色	—	—	—	—	まあめが細かい 1.5ミリ以下の茶色の細胞 粒を含む	良好	g-8区	完形。楕円形	
125	土器 片端	脚印片	ナダ	ナダ	—	にぶい 緑色	にぶい 緑色	—	—	—	—	まあめが細かい 透視感や1.5ミリ以下の茶色の 細胞粒を含む	良好	g-6区	完形。楕円形 片端の上部のみ 透視感がある	

番号	器形	器部	色調			文様			地土	焼成	グリッド名	備考
			外側面	内部面	底面	外側面	内部面	外部面				
126	土製円盤	網底片	ナゲ	ナゲ	一	にふい黄褐色	にふい褐色	—	—	ややきめが無い —24.4%の砂粒を含む	良好	3-5区 泥質外壁面に 火炎付着
127	土製円盤	網底片	ナゲ	ナゲ	一	にふい褐色	にふい褐色	—	—	ややきめが無い 11.9%以下約2.8%の砂粒を含む	良好	3-4区 完形
128	土製円盤	網底片か 貝殻条痕の上をナゲ	ナゲ	一	にふい褐色	にふい褐色	—	—	—	ややきめが無い 11.9%以下約2.8%の砂粒を含む	良好	3-4区 完形
129	有孔円盤	網部片	貝殻条痕	ナゲ	一	褐色	褐色	褐色	—	ややきめが無い 11.9%以下約2.8%の砂粒を含む	良好	3-11区 半火 半水
130	有孔円盤	網底片	貝殻条痕	ナゲ	一	にふい褐色	褐色	褐色	—	ややきめが無い 11.9%以下約2.8%の砂粒を含む	良好	3-9区 半火 半水

表7 上器片鍾計測表

番号	出土地区	型式	長軸 cm	短軸 cm	厚さ cm	重さ g	備考
國118	f-7区	A	289	201	11.7	72	
國119	g-11区	A	253	205	10.5	61	
國120	f-8区	A	356	210	8.0	91	
國121	c-6区	—	(33.6)	(26.6)	(0.9)	(8.2)	半欠
國122	f-5区	C	482	332	1.00	21.7	片側のみ有溝
國123	a-6区	C	322	192	0.88	63	片側のみ有溝
國124	g-8区	A	440	412	0.63	182	
國125	g-6区	A	356	246	1.95	125	
國171	a-7区	A	295	225	0.99	71	
國503	c-8区	A	366	305	1.05	152	
國1129	c-4区	A	327	237	0.55	65	精製土器片
國2340	h-9区	A	330	283	1.02	123	
國2347	a-9区	A	293	(19.3)	0.97	64	短輪—深欠損 口縁片
國2351	a-8区	A	384	276	0.99	11.9	精製土器片か —深欠損、輪形
國2437	b-5区	A	375	275	1.12	152	外縁斜面にスリット
國2539	f-7区	A	(36.0)	264	1.04	(13.2)	長輪端—深欠損
國3116	g-11区	A	256	198	0.76	53	
國3186	i-10区	A	392	298	1.00	137	
國3332	f-10区	A	370	343	1.00	140	略方形
國3433	h-5区	A	344	288	0.87	95	—深欠損 精製土器片
國3610	d-7区	A	404	208	1.39	143	
國3867	b-7区	A	311	177	1.16	78	
國3992	b-5区	A	300	229	0.93	72	
國3996	b-5区	A	380	195	1.07	92	

番号	出土地区	型式	長軸 cm	短軸 cm	厚さ cm	重さ g	備考
國5120	j-10区	A	310	223	0.60	55	精製土器片
國5469	g-7区	A	375	245	1.15	126	
國5492	f-7区	A	335	195	1.20	90	
國5528	g-8区	A	(283)	238	0.90	(7.7)	長輪端—深欠損
國5899	g-9区	A	280	221	0.94	7.3	
國6072	h-7区	A	307	218	1.25	9.6	
國6173	g-8区	A	415	312	0.55	10.8	精製土器片 頭部片
國2477	e-6区	—	303	244	0.70	61	未製品(輪凹形, 切口なし)
國3822	f-6区	—	339	276	1.20	12.7	未製品(輪凹形, 切口なし)
國4632	h-11区	—	388	298	0.84	13.4	未製品(輪凹形, 切口なし)
國5191	d-9区	—	(40.0)	259	0.40	(6.3)	未製品(方形, 切口なし) 未製土器片。 一部欠損

表8 土製円盤・有孔円盤計測表

番号	出土地区	型式	長軸 cm	短軸 cm	厚さ cm	重さ g	備考
國126	a-5区	510	470	1.20	323		土製円盤
國127	g-4区	504	502	1.00	293		土製円盤
國128	h-10区	332	327	1.05	141		土製円盤
國4691	g-11区	569	527	1.05	388		土製円盤
國5528	g-8区	414	376	1.20	24.0		土製円盤
國129	j-11区	506	(39.0)	1.15	23.6		有孔円盤。半欠
國130	i-9区	548	535	1.20	382		有孔円盤

表 9 石器計測表 (cm, t)

A - 三角形
 B - 五角形
 C - 圓錐形
 I - 平基
 II - 凹基
 a - 基部の両端を加工
 b - 加工なし

番号	出土地区	型式	全長	幅	厚さ	抉り		先端 角度	重さ	石材	破損状態	備考	図 番号
						幅	深さ						
1	a - 4	Aa-II	1.97	1.4	0.24	-	-	61	0.8				
2	a - 6	C-II	(2.1)	-	0.4	-	-	41.5	0.8	砂岩	脚部欠損		
3	a - 9	C-II	(2.8)	-	0.3	-	-	44	0.6	チャート	脚部欠損		
4	b - 3	Aa-I	(1.9)	1.7	0.4	1.3	0.4	35.5	1.1	チャート	先端部欠損		
5	b - 6	Aa-I	1.9	1.6	0.3	1.4	0.3	50	1.0				4
6	b - 8	Ab-I	(1.9)	1.3	0.25	0.7	0.25	42.5	0.6		脚部欠損		
7	b - 9	C-I	1.9	1.1	0.3	0.8	0.25	43	0.7				10
8	b - 9	Aa-I	2.8	1.55	0.35	1.3	0.6	54	1.1	チャート			7
9	b - 9	Aa-I	(1.6)	1.6	0.45	-	-	62	1.0	チャート	脚部欠損		
10	c - 4	-	(1.8)	1.4	0.35	-	-	-	0.6	砂岩	先端部・ 脚部欠損		
11	c - 5	C-II	(2.0)	1.0	0.3	-	-	54	0.6	チャート	脚部欠損		
12	c - 6	-	(1.7)	1.2	0.4	1.0	0.3	44	0.3				
13	c - 8	Aa-I	2.9	1.8	0.5	1.1	0.3	48	2.6	砂岩			20
14	c - 8	Aa-I	2.15	1.2	0.4	0.9	0.4	40.5	0.8	黒曜石			14
15	c - 8	Aa-I	3.1	1.5	0.4	1.3	0.7	27.0	1.0	チャート			8
16	d - 3	Aa	(2.0)	1.4	0.25	-	-	39.5	0.7	砂岩	先端部残存		
17	d - 7	Aa-I	(2.1)	1.3	0.35	-	-	36.5	0.7		脚部欠損		
18	e - 5	Ab-I	1.95	1.6	0.3	1.1	0.35	54	0.7	黒曜石			5
19	e - 9	Aa-I	3.0	1.8	0.45	1.5	0.6	36.0	1.3				9
20	f - 8	-	(1.8)	1.5	0.45	-	-	82.5	1.3		先端部残存		19
21	g - 3	Bb-II	2.2	1.6	0.3	1.3	0.25	58	0.8	チャート			3
22	g - 3	-	(1.1)	1.0	0.3	-	-	54	0.2	チャート	先端部残存		
23	g - 7	Ab-I	2.0	1.3	0.25	0.9	0.3	41.5	0.65	砂岩			6
24	g - 8	-	1.7	1.3	0.3	0.7	0.3	84.5	0.6	チャート			11
25	g - 8	C-I	(2.0)	1.25	0.3	-	-	53.5	0.7		脚部欠損		18
26	g - 8	C-I	(2.2)	1.2	0.3	-	-	78	0.8	砂岩	脚部欠損		15
27	g - 8	Ba-I	(2.3)	-	0.35	-	-	66	0.9	砂岩	脚部欠損		12
28	g - 8	Ab-II	1.8	1.4	0.3	-	-	42	0.55	黒曜石			1
29	g - 9	Aa-I	2.1	1.6	0.3	1.3	0.5	44.5	0.9				2
30	g - 10	C-I	2.8	1.4	0.3	0.9	0.5	64	0.8	砂岩			13
31	h - 10	Aa-I	2.8	1.6	0.4	0.9	0.35	46	1.9	砂岩			
32	i - 7	Ba-I	1.8	1.25	0.35	0.6	0.3	61.5	0.5	砂岩			16
33	i - 8	-	(1.9)	1.6	0.5	-	-	-	1.2		先端部 脚部欠損		
34	i - 8	Ba-I	1.3	1.2	0.35	0.6	0.15	69	0.3	チャート			17
35	j - 4	Aa-I	1.7	1.2	0.3	0.7	0.2	48	0.5	砂岩			

表10 小型剥片石器計測表(cm, f)

番号	出土地区	石 材	長軸	短軸	厚さ	重さ	備 考	図 No.
1	a - 7	真岩	22	1.9	0.69	29	石錐	28
2	d - 11		3.99	2.05	0.7	4.9	石錐	
3	f - 6	チャート	2.11	1.05	0.43	1.1	スクリーパー	29
4	f - 7	黒曜石	1.81	1.84	0.82	1.7	ラウンドスクリーパー	
5	f - 7	チャート	3.83	2.2	0.87	6.2	石錐	21
6	f - 8	チャート	3.21	2.13	0.81	5.15	スクリーパー	
7	g - 6	黒曜石	(1.3) 0	1.4	0.32	0.8	スクリーパー	30
8	g - 6	砂岩	(3.9) 1.55	1.16	(4.0)	1.7	石錐	24
9	g - 6	チャート	2.48	1.7	0.72	2.5	ラウンドスクリーパー	
10	g - 6	黒曜石	1.44	0.48	0.21	0.3	異形石器	31
11	g - 7	黒曜石	4.16	2.27	0.7	5.5	石錐?	
12	g - 8	チャート	3.02	2.6	1.1	7.7		
13	g - 8	チャート	4.8	3.75	1.65	3.82	スクリーパー	
14	g - 8	チャート	2.13	1.72	0.55	1.6	石錐	22
15	g - 8		1.72	1.46	0.47	1.8	スクリーパー	
16	g - 8	黒曜石	2.01	1.56	0.68	1.05		
17	g - 8	チャート	(3.2) 1.68	0.89	0.3	1.2	スクリーパー	
18	g - 8	チャート	4.67	2.72	1.13	16.7		
19	g - 11		4.96	1.16	0.55	1.7	石錐	25
20	h - 6	チャート	(4.2) 1.17	0.93	0.1	0.7	磨製	32
21	i - 4	チャート	3.0	2.57	0.84	6.6	スクリーパー	
22	i - 8	チャート	2.97	2.05	0.9	4.1	ラウンドスクリーパー	28
23	j - 8	砂岩	3.87	2.0	0.53	3.5	石錐	26
24	j - 9	砂岩	3.05	2.27	0.67	3.6	石錐	27

表11 石斧計測表(cm, f)

番号	出土地区	長軸	短軸	厚さ	重さ	備 考	図 No.
1	a - 3	-	-	-	-	打製	
2	e - 5	-	-	-	-	磨製柄	40
3	e - 6	-	10.23	1.38	-	打製	36
4	e - 9	-	-	-	-	打製	
5	f - 4	7.72	2.51	1.75	6.0	磨製、石ノイ状	38
6	f - 4	-	-	-	-	打製	
7	f - 7	7.74	4.23	1.56	6.5		39
8	f - 7	-	-	-	-	打製	
9	f - 7	-	2.92	1.13	-	磨製、小形	
10	f - 7	-	-	-	-	打製	
11	f - 8	7.7	5.57	1.45	8.0	打製	
12	f - 8	12.07	5.93	1.75	(18.0)	局部磨製?	37
13	g - 6	-	-	-	-	局部磨製、刃部	
14	g - 6	-	-	-	-	局部磨製、刃部	
15	g - 7	-	-	-	-	打製	
16	g - 8	10.13	4.2	2.55	15.5	局部磨製	35
17	g - 9	-	5.8	3.12	(27.0)	磨製	
18	g - 10	-	-	-	-	打製	
19	h - 4	-	-	1.38	-	打製	
20	h - 11	-	-	-	-	磨製、柄	
21	i - 7	-	4.51	-	-	磨製、柄	
22	i - 9	-	-	2.78	-	磨製、柄	41
23	i - 11	-	5.15	1.93	-	打製	
24	k - 9	-	5.39	1.02	-	打製	

表12 石庵丁様石器計測表(cm, f)

番号	出土地区	長軸	短軸	厚さ	重さ	備 考	図 No.
1	g - 6	-	-	-	-	擦痕有	44
2	j - 9	9.45	5.56	1.08	10.5	擦痕有	43
3	k - 9	12.39	7.52	1.07	16.0	擦痕有	42

表13 磨器,大型剝片石器(cm, f) A~縦長剝片利用 B~横長剝片利用

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備 考	図 No.
1	a - 8	B	7.59	5.8	2.05	9.5	砂岩	
2	a - 8		6.43	6.06	2.34	12.5		46
3	b - 4	A	5.5	3.2	0.75	1.0	ナイフ状	
4	b - 5	B	9.06	5.79	0.99	6.5		
5	b - 9		9.36	5.8	2.3	10.0	砂岩	
6	c - 6	A	9.44	6.59	3.16	19.0	砂岩	
7	c - 8		8.17	7.54	2.52	30.5	擦器	
8	d - 5	A	6.18	5.45	0.97	4.5		
9	d - 9		7.54	4.53	2.2	7.5	砂岩	
10	e - 6		5.89	5.9	1.1	4.5		
11	e - 8	A	7.28	4.73	1.83	6.0	砂岩	
12	e - 9	A	8.7	4.55	1.43	6.0		
13	f - 6	A	9.20	6.67	1.95	9.5	砂岩	47
14	f - 7		9.53	8.74	1.06	11.5	砂岩	45
15	f - 8	A	13.18	7.39	2.37	31.0	砂岩	48
16	f - 8	B	10.04	7.06	1.81	11.5	砂岩	
17	f - 10		8.94	3.8	1.42	8.0	ナイフ?	
18	g - 8		6.98	4.46	1.56	8.0	擦器	
19	g - 8	B	5.27	2.94	0.8	1.0	真岩	
20	g - 9	B	9.96	7.21	2.28	21.5	砂岩	
21	g - 10	A	14.48	5.26	2.52	19.5	砂岩	
22	h - 10	A	9.08	4.6	1.9	8.5	砂岩	
23	i - 9	A	5.54	3.42	0.87	1.5	尖頭状	
24	i - 11		5.65	3.9	0.99	2.5		
25	i - 11	A	5.22	5.17	1.27	2.5		
26	j - 9	A	7.82	6.87	1.53	9.5	砂岩	
27	k - 8		5.74	4.74	2.36	8.0		
28	l - 4		-	-	1.05	-	砂岩	

表14 石錐計測表 (cm, #)

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
1	a - 3	B	777	650	250	195	
2	a - 4	B	703	652	157	120	
3	a - 5	B	637	508	227	100	
4	a - 6	A (447) (359)	134	20			
5	a - 7	A	371	331	130	25	
6	a - 7	A (440) (420)	136	(30)	欠損		
7	a - 7	B	675	343	175	65	
8	a - 8	B	613	723	301	240	
9	a - 8	B	809	582	182	110	
10	a - 9	C	459	428	230	60	
11	b - 3	B	823	769	235	225	
12	b - 3	A	451	307	181	30	
13	b - 4	B	838	707	247	(240)	欠損
14	b - 4	B	786	718	336	270	
15	b - 6	B	724	651	237	160	
16	b - 7	B	707	627	272	185	
17	b - 8	B	687	492	227	95	片方だけ打ち欠いている
18	b - 8	C	885	677	334	295	
19	b - 8	A	673	353	198	70	
20	b - 8	C	757	687	359	230	
21	b - 9	B	470	440	182	55	
22	b - 11	A	570	410	129	35	
23	c - 4	B	813	676	222	200	
24	c - 4	B (243)	214	083	(10)	欠損	
25	c - 4	B (632)	753	194	(130)	欠損	
26	c - 5	A (435)	345	094	(15)	欠損	
27	c - 5	C (7.10)	(434)	(239)	(105)	欠損	
28	c - 5	B	765	(783)	305	300	凹石転用
29	c - 5	(A) (885)	(450)	(289)	(90)	欠損	
30	c - 6	A	424	323	189	30	
31	c - 7	C (610) (523)	(120)	(55)	欠損		
32	c - 7	C	774	760	343	275	
33	c - 7	C (7.01)	(430)	(180)	(55)	欠損	
34	c - 8	B	814	746	246	260	
35	c - 8	B (720) (703)	250	(140)	欠損		
36	c - 10	B	611	599	243	130	
37	c - 10	B	896	743	185	205	
38	d - 3	B	762	710	259	260	
39	d - 3	B	890	659	276	225	
40	d - 4	B	742	682	296	220	
41	d - 4	B	707	573	285	155	
42	d - 5	B (596)	807	287	(200)	欠損	
43	d - 5	B	806	755	315	(290)	欠損
44	d - 6	A	655	(419)	(150)	(55)	
45	d - 6	B	(759) (414)	330	(145)	欠損	
46	d - 6	B	827	673	275	(230)	欠損
47	d - 7	B	9.70	752	291	320	
48	d - 7	B	676	600	226	125	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
49	d - 7	B	9.00	7.70	352	335	
50	d - 7	B	7.29	6.11	205	130	
51	d - 8	B	7.09	6.49	229	155	
52	d - 9	B	5.97	5.07	150	65	
53	d - 9	A	3.45	2.81	157	25	
54	d - 9	A	6.17	5.23	218	95	
55	d - 9	A	4.68	3.46	173	45	
56	d - 9	A	4.26	3.80	171	40	
57	d - 9	A	5.58	3.83	131	40	
58	d - 10	B	6.71	6.00	319	190	
59	e - 4	B	7.18	6.20	315	155	
60	e - 5	B (5.10)	8.04	220	(180)	欠損	
61	e - 5	C	6.11	5.61	300	130	
62	e - 6	B	5.89	5.55	245	109	
63	e - 6	B	6.85	5.76	(248)	140	欠損
64	e - 7	B	6.38	6.31	240	115	
65	e - 7	B	7.40	(6.21)	297	(185)	欠損
66	e - 7	A	5.70	4.39	262	90	
67	e - 7	(C)	(7.27)	(5.69)	(135)	(65)	欠損
68	e - 8	B (446)	8.11	188	(100)	欠損	
69	e - 9	A	6.93	4.24	207	85	
70	e - 9	B	8.23	9.29	241	320	
71	e - 9	A	4.25	3.14	3.13	45	
72	e - 10	B	8.50	7.34	299	265	
73	f - 3	B	8.43	5.96	180	140	
74	f - 3	A	6.46	3.00	110	30	55
75	f - 4	B	9.38	7.50	344	350	75
76	f - 4	B	7.32	6.96	384	250	凹石転用
77	f - 4	B	7.82	4.33	155	100	
78	f - 4	B	7.73	5.08	216	(130)	欠損
79	f - 4	B	7.75	6.55	403	270	
80	f - 4	B	8.27	7.00	181	160	
81	f - 5	A	4.53	3.30	158	40	
82	f - 5	(C)	(5.30)	(7.80)	(175)	(100)	欠損
83	f - 6	B	3.45	2.84	111	20	58
84	f - 6	C	8.75	7.68	327	300	
85	f - 6	B	6.32	6.19	279	180	70
86	f - 6	B	9.63	6.79	237	265	76
87	f - 7	A	5.82	4.68	157	65	51
88	f - 7	A	6.51	5.00	177	100	
89	f - 7	B	(5.34)	5.58	216	(120)	欠損
90	f - 7	B	(4.66)	5.65	220	(60)	欠損
91	f - 7	B	6.16	5.51	149	80	72
92	f - 7	A ₂	5.40	4.14	212	70	56
93	f - 7	A	5.70	4.45	215	60	
94	f - 8	B	7.54	7.85	290	300	凹石転用
95	f - 8	B	6.85	5.50	183	120	
96	f - 8	B	4.83	3.94	157	35	片方だけ打ち欠いている

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
97	f-8	A	492	295	161	39	
98	f-8	C	640	458	182	80	64
99	f-8	B	563	371	088	30	60
100	f-8	B	861	828	260	500	77
101	f-8	A	682	424	214	95	52
102	f-8	B	491	724	286	180	
103	f-9	B	467	388	065	25	59
104	f-9	B	(680)	681	332	(205)	欠損
105	f-9	C	700	696	321	215	
106	f-10	B	416	485	191	60	62
107	E-3	B	(510)	628	278	(140)	欠損
108	E-3	C	650	440	218	80	65
109	E-4	B	(451)	528	118	(45)	欠損
110	E-4	B	593	507	191	85	67
111	E-5	B	(940)	(554)	(193)	(155)	欠損
112	E-5	B	722	597	22	160	
113	E-6	A	458	389	140	39	
114	E-6	B	605	596	182	125	
115	E-6	A	515	415	246	70	
116	E-7	C	847	807	209	135	
117	E-7	B	715	645	198	135	69
118	E-7	B	647	595	149	100	68
119	E-7	B	(333)	693	084	(20)	欠損
120	E-7	B	580	499	125	70	
121	E-7	B	679	651	167	130	
122	E-7	B	797	691	307	245	
123	E-7	C	(380)	(820)	(243)	(75)	欠損
124	E-7	B	643	697	274	160	63
125	E-7	(A)	476	(572)	(270)	(70)	欠損
126	E-8	B	753	574	106	90	73
127	E-8	B	498	536	165	80	74
128	E-8	B	512	491	201	60	
129	E-8	A	400	341	135	30	53
130	E-8	B	334	302	102	20	57
131	E-8	B	626	600	133	80	
132	E-8	B	877	699	304	275	
133	E-8	B	882	743	382	350	
134	E-9	B	558	624	262	(120)	61
135	E-9	(C)	(634)	(303)	(088)	(25)	欠損
136	E-10	(B)	(933)	(695)	(248)	(205)	欠損
137	E-10	A	523	230	085	20	54
138	E-10	B	823	507	174	125	71
139	E-10	A	416	347	200	39	
140	E-10	B	847	(678)	340	(280)	欠損
141	E-11	B	(326)	557	222	(60)	欠損
142	E-11	B	684	626	239	190	
143	E-11	B	658	559	230	120	

番号	出土地区	型式	長軸	短軸	厚さ	重さ	備考
144	g-11	B	555	389	108	30	片方だけ打ちついでいる
145	h-6	(C)	(715)	(601)	(253)	(130)	欠損
146	h-7	B	924	665	270	180	
147	h-8	B	662	603	170	105	
148	h-8	A	407	313	175	35	
149	h-8	B	622	499	279	120	
150	h-8	B	788	687	324	250	
151	h-8	(B)	(688)	(416)	(309)	(115)	欠損
152	h-9	C	655	617	183	125	
153	h-9	C	683	609	307	185	
154	h-9	(C)	(560)	(495)	(108)	(45)	欠損
155	h-9	C	604	600	252	120	
156	h-9	(B)	(705)	(654)	(130)	(80)	欠損
157	h-9	A	711	370	183	75	
158	h-9	C	1617	907	358	510	
159	h-9	B	614	610	259	130	
160	h-10	B	702	602	263	175	
161	h-11	A	740	588	136	95	
162	h-11	B	741	624	197	130	
163	h-11	B	755	695	264	220	片方だけ打ちついでいる
154	h-11	B	753	636	234	175	
165	i-6	B	691	518	264	135	
166	i-6	B	796	735	342	270	
167	i-7	B	868	821	218	245	
168	i-8	B	723	586	143	90	
169	i-9	B	785	625	256	195	
170	i-9	B	790	661	286	195	
171	i-9	C	886	(374)	265	(295)	欠損
172	i-10	C	690	672	193	120	
173	i-11	C	667	653	256	165	
174	i-11	B	364	333	100	15	
175	i-11	B	784	749	318	235	
176	i-11	(C)	(684)	(620)	(312)	(165)	欠損
177	j-4	B	513	470	174	65	
178	j-8	B	694	692	359	225	
179	j-9	B	799	700	240	210	
180	j-9	B	780	689	169	130	
181	j-9	C	787	706	262	215	
182	j-10	(C)	672	599	276	170	片方だけ打ちついでいる
183	j-10	A	749	481	129	83	
184	j-10	(B)	(980)	(383)	(224)	(130)	欠損
185	j-10	B	399	352	096	25	
186	j-10	B	905	790	243	215	
187	j-11	A	447	271	147	14	
188	k-9	B	740	680	188	125	
189	l-9	B	679	611	226	130	
190	l-10	C	982	979	411	520	

表15 蔽 石

番号	出土地区	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	図 No.
1	a - 7	1179	98	488	830	砂岩 側面以外を 使用	
2	a - 9	163	891	67	1480	磨石	
3	b - 3	1094	849	375	495	砂岩	
4	b - 4	794	726	458	335	砂岩 四石	
5	b - 6	753	586	412	300	磨石	
6	c - 9	(1216)	(889)	(586)	880	砂岩 磨石	
7	c - 10	915	67	46	520	磨石	
8	d - 6	953	644	429	460	砂岩 磨石	79
9	d - 6	833	731	304	290	砂岩	
10	d - 7	113	846	484	625	砂岩	
11	e - 5	(728)	(554)	(277)	(205)	砂岩	
12	e - 6	1124	825	45	665	砂岩 全側面使用して いる可能性大きい	78
13	c - 8	(728)	(723)	(427)	(350)	砂岩 側面以外も 使用	
14	e - 8	966	862	209	240	砂岩	
15	e - 9	(115)	(599)	(588)	(500)	砂岩 側面以外も 使用	
16	e - 10	(937)	(614)	(51)	(450)	磨石	
17	f - 6	(913)	(704)	(624)	(515)	砂岩 側面以外も 使用	
18	f - 6	(138)	(934)	(798)	(1225)	砂岩 側面以外も 使用	
19	f - 8	(749)	(643)	46	(335)	砂岩 磨石	
20	f - 8	(961)	(461)	(41)	(315)	磨石	
21	f - 8	1307	629	382	490	砂岩 四石	
22	f - 8	924	72	555	505	砂岩 磨石	
23	f - 8	892	739	633	580	砂岩 磨石	
24	f - 8	674	582	45	275		
25	g - 3	67	583	199	125	砂岩 四石	
26	g - 7	834	793	353	635	砂岩	
27	k - 8	72	673	315	200	砂岩 四石	
28	g - 8	88	748	747	685		
29	g - 9	(1012)	(721)	(549)	(540)	砂岩 側面以外も 使用	
30	g - 9	(1204)	(633)	(614)	(635)	砂岩 側面以外も 使用	
31	h - 8	816	668	517	385	砂岩 磨石	
32	i - 8	696	647	186	125	砂岩 四石	
33	i - 11	818	759	397	285	砂岩	80
34	i - 11	803	72	518	400	砂岩 四石	
35	k - 5	83	81	212	220	砂岩 四石	82

表16 磨 石 (cm, kg)

番号	出土地区	石材	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	図 No.
1	a - 7	砂岩	(8.74)	815	500	(510)		
2	b - 6	砂岩	(7.92)	942	454	470	敲石	
3	d - 6	砂岩	13.72	1064	(460)	(850)		
4	f - 8	砂岩	(11.79)	(5.95)	(6.15)	(6.80)		
5	f - 8	砂岩	14.00	952	467	865		88
6	f - 8	砂岩	(8.56)	(6.60)	(4.15)	315	敲石	
7	g - 7	砂岩	165	62	444	605	敲石	
8	g - 8	砂岩	14.30	960	546	1050		89
9	h - 8	砂岩	(8.71)	(10.79)	47	(6.20)		
10	i - 7	砂岩	8.77	706	395	340	石鍬	
11	i - 9	砂岩	(9.1)	833	(5.21)	(5.45)		
12	k - 9	砂岩	1185	879	657	895		

表17 凹 石 (cm, kg)

番号	出土地区	石材	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考	図 No.
1	a - 6	砂岩	7.64	705	393	285	敲石	
2	a - 8	砂岩	(13.4)	(6.55)	(5.22)	(695)	両面使用	
3	b - 4	砂岩	528	447	287	95	両面使用	
4	f - 7	砂岩	(6.84)	806	322	(275)	両面使用 石鍬	
5	g - 4	砂岩	12.39	0.27	334	855	両面使用	84
6	g - 7	砂岩	10.7	8.3	402	525	両面使用	
7	g - 8	砂岩	(15.44)	(2.23)	508	1385		87
8	g - 8	砂岩	(6.58)	(8.03)	412	395	若干凹凸	
9	g - 8	砂岩	7.28	473	251	130	両面使用 石鍬	
10	h - 4	砂岩	8.74	816	555	595	両面使用	
11	h - 5	砂岩	10.16	8.5	508	645	両面使用 磨石	85
12	h - 6	砂岩	11.02	9.85	558	770	両面使用	
13	h - 8	砂岩	6.74	564	243	120		
14	i - 5	砂岩	13.02	12.16	400	1100	両面使用	86
15	i - 5	砂岩	26.1	17.0	66	4220	両面使用	

表18 石 鍬 (cm, kg)

番号	出土地区	長軸 (cm)	短軸 (cm)	厚さ (cm)	重さ (kg)	備考
1	b - 6	27.3	(1.05)	7.6	(4770)	
2	b - 7	(1.65)	20.4	8.5	(5800)	
3	e - 5	(2.30)	(1.45)	4.25	(2230)	
4	e - 9	(1.75)	(0.65)	8.5	(3720)	
5	f - 3	(2.03)	(1.45)	10.3	(4600)	
6	f - 7	(2.83)	(1.55)	5.8	(3950)	
7	f - 7	(2.15)	(1.80)	10.25	(7500)	
8	g - 4	(3.30)	(2.07)	7.6	(7500)	
9	h - 5	33.3	1.67	12.0	(13000)	
10	h - 8	(3.15)	(1.45)	7.5	(7215)	91
11	h - 8	(1.75)	(1.65)	11.65	(4300)	
12	i - 8	(1.55)	(1.05)	8.7	(2360)	
13	j - 10	25	(1.75)	4.6	(3720)	

図 版



発掘区全景（北から）

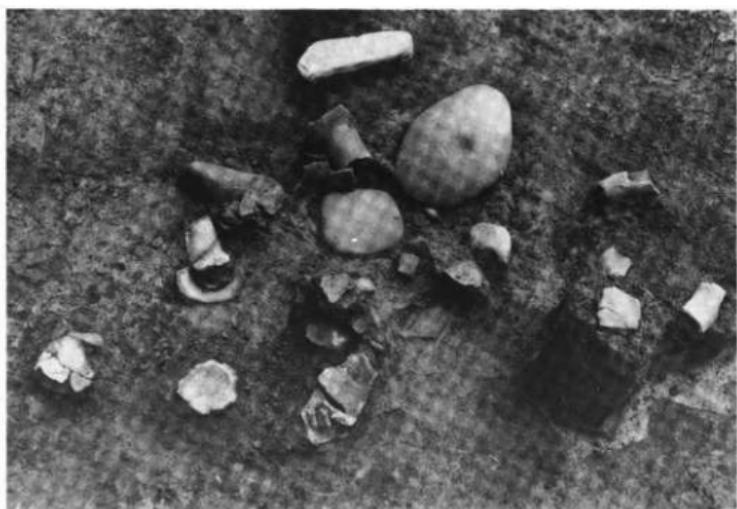


西壁土層断面（南東から）

圖版 2



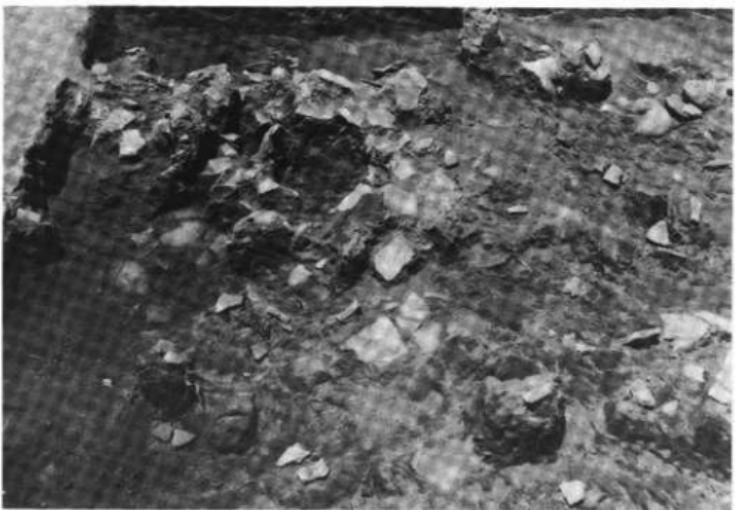
縄文土器出土状況



赤生土器出土状況

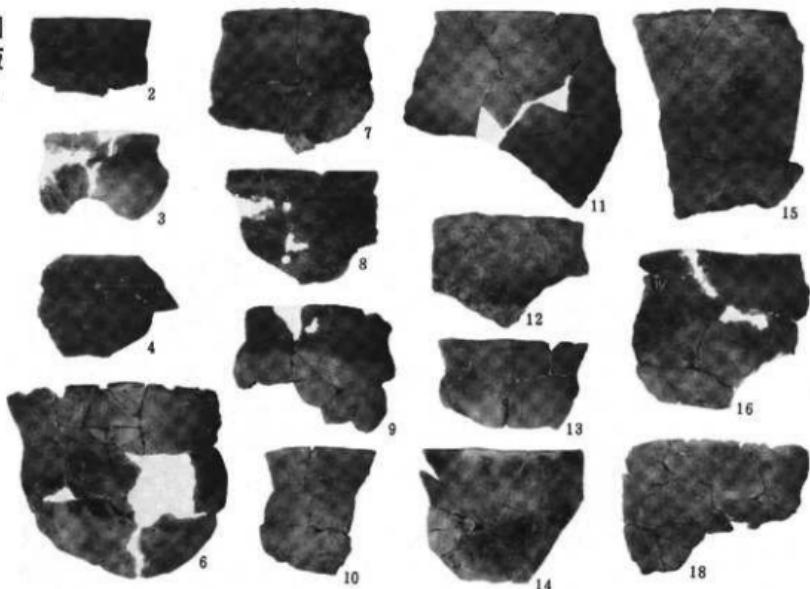


弥生土器（器台）出土状況

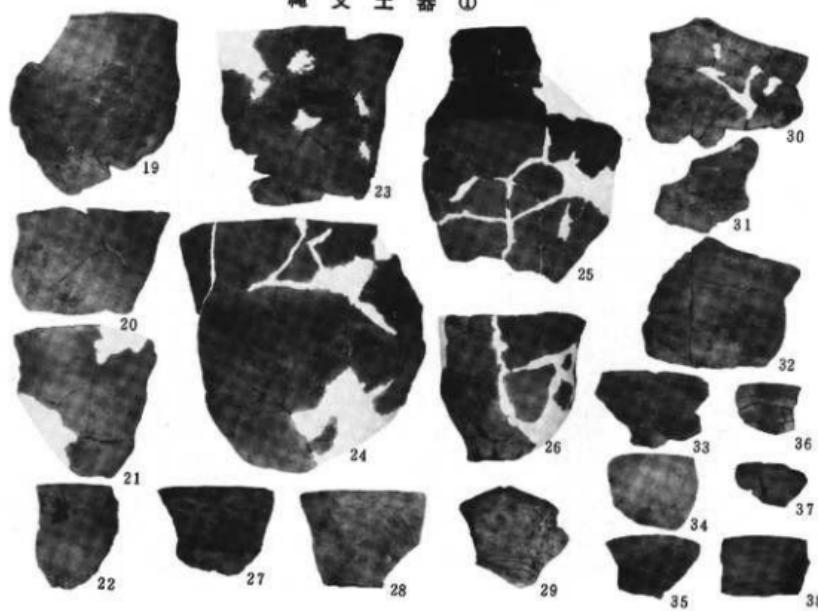


ピット検出状況（中央やや土の黒い部分）

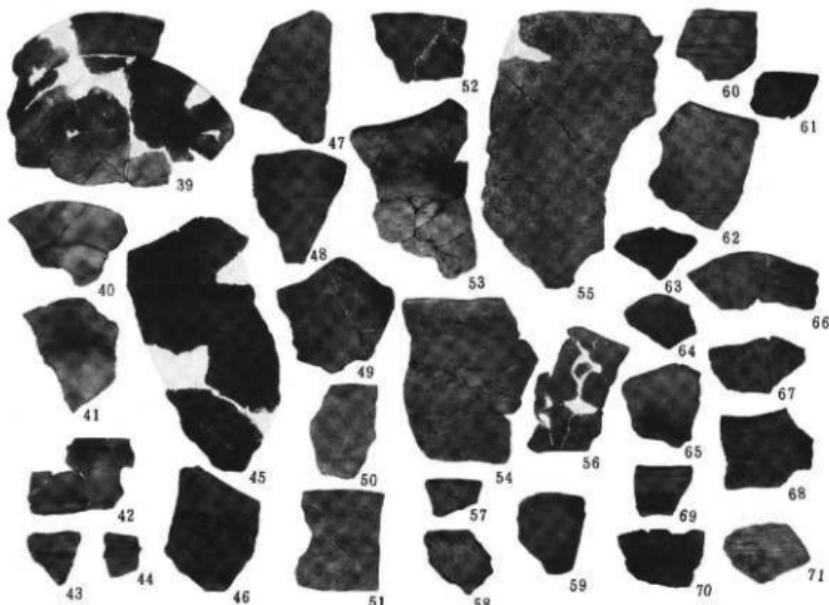
図版
4



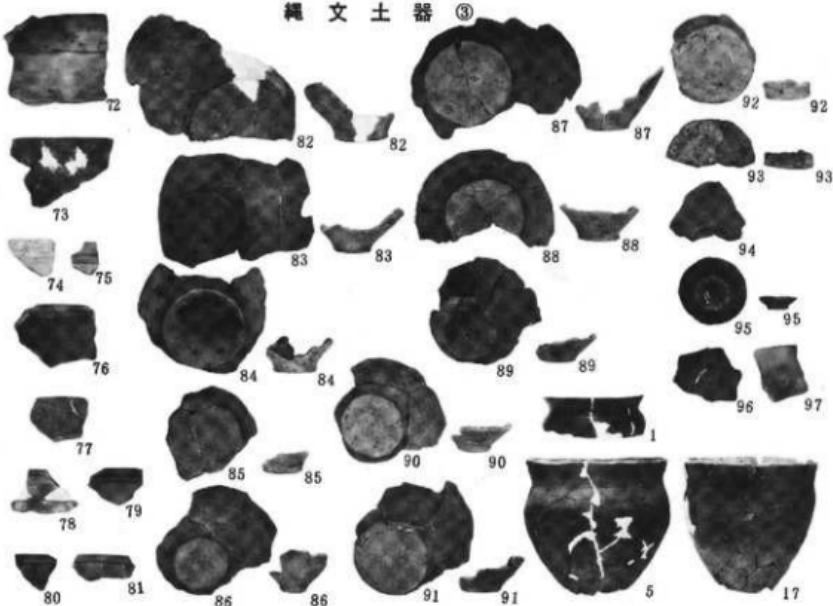
縄文土器①



縄文土器②

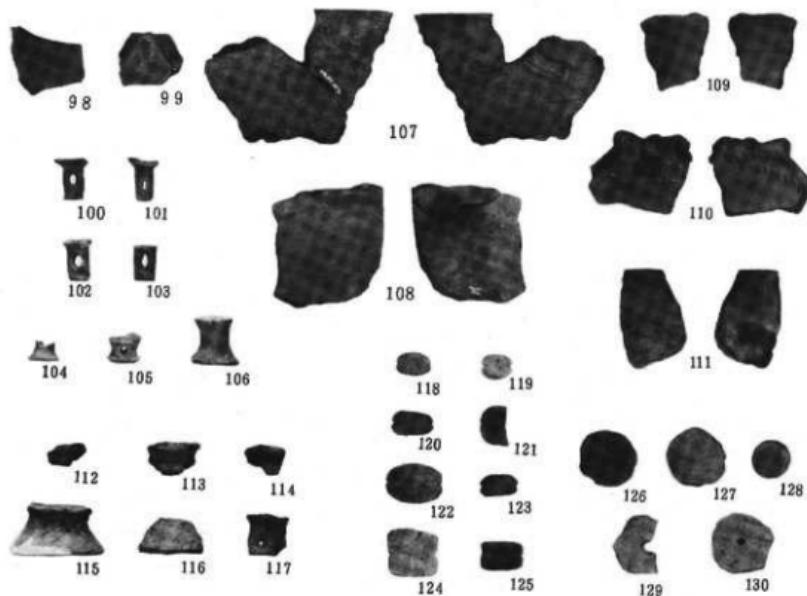


縄文土器③

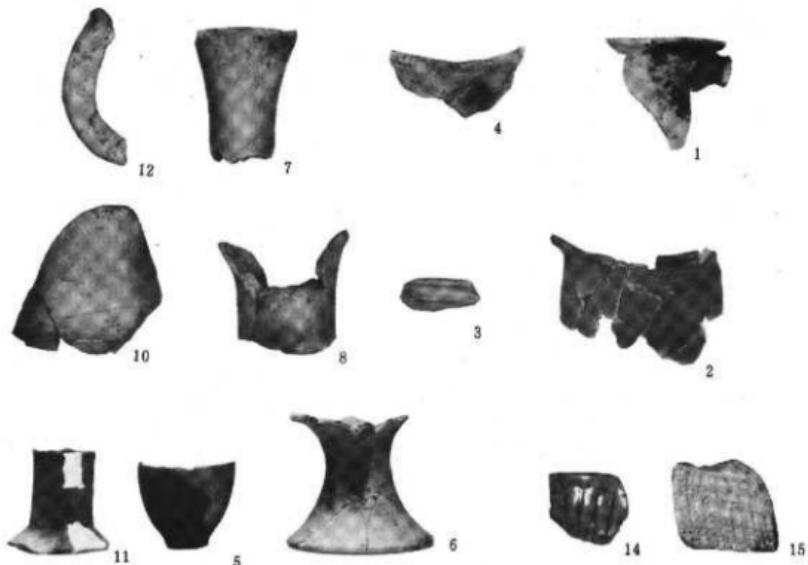


縄文土器④

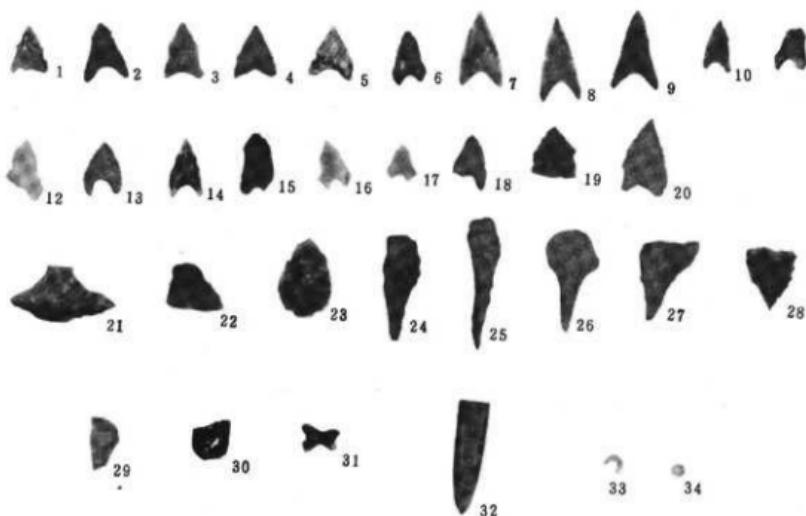
図版 6



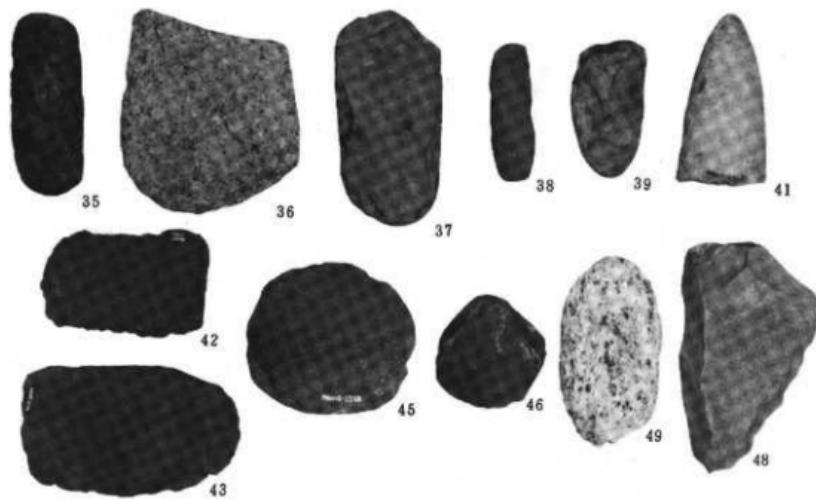
繩文土器 ⑤



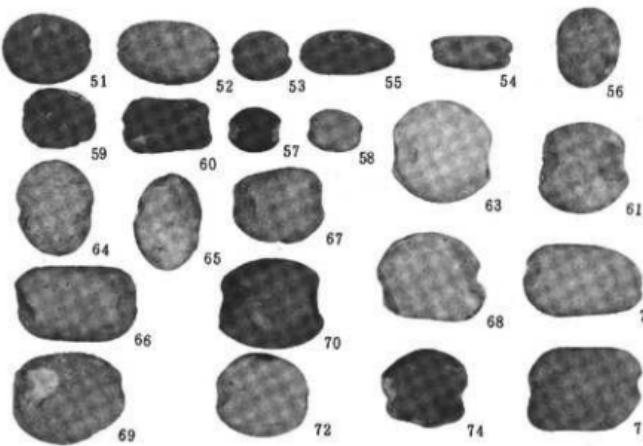
弥生土器、陶磁器



石鏃、石匙、石錐他



石斧、石庖丁様石器、剥片石器、輕石



石錘

石錘、敲石、
凹石



90



89

石皿、磨石

宮崎大学埋蔵文化財調査報告 I

— 宮大農学部平畠遺跡 XXV 区 —

発行年月日 昭和 60 年 6 月 5 日

編 集 宮崎県教育委員会文化課

発 行 宮 崎 大 学
宮 崎 県 教 育 委 員 会

印 刷 助宮崎県教育会館印刷部
〒880 宮崎市橋通東1丁目9番38号
TEL (0985) 23-3548